自由自在に
眞實の
勝に誇らぬ
憂ひけり。
殘りながらに
戰ふを
浮びてありし
打そろひ
若しよせ來る
たけくとも
されば二の
其前に
しばらく鋭氣を

するまでは
勝算なしと
東郷は
露西亞の北の
戰友の
氣つかひながら
艦隊が
旅順艦隊
ことあらば
二倍の敵に
艦隊が
旅順艦隊
養ひて

終始全き
勝ちながら
唯だそれのみを
大海に
亞細亞の極に
ながめつゝ
艨艟巨艦
助けんと
我海軍は
なやむべし。
一にならぬ
ほろぼしつ
さて其後に

遠來の
思ひしものを、
敵艦は
人に恐れて
此上は
かの堅砦を
攻め落し
隱れて出でぬ
打ちくだく
廟算こゝに
その爲に
子規
若殿原と

第二艦隊
あなにくや
鼠の穴に
出ざるに
金城鐵壁
背面より
其天險を
軍艦を
外はあらじと
定りて
第三軍に
なくや五月の
駒並めて

破らんと
旅順にひそむ
かくれつゝ
ひとしかりけり。
なりとても
唯だひた攻に
たのみつゝ
城の上より
作戰の
乃木希典は
長として
さみだれに
遠征の途に

上りけり。
長男中尉
六歳の
若き士官の
六日に
父が子なれば
堪へたれど
つひに歸らぬ
かげろひの
掌中の珠を
悲まず
君に命を
習なり、

其遠征の
勝典は
身は青春の
はかなくも
かの南山に
勇ましく
武運つたなく
旅に行く
人の命ぞ。
失ひし
戰場にして
獻げたる
『勝典名譽の

道にして
二十を過ぎて
血にもゆる
五月の二十
戰ひて
善く其職に
傷重く
果敢なきは實に
さりながら
希典すこしも
死ぬるのは
日本男兒の
戰死して

斯く云ふ
知らせん』と
泣かぬは泣くに
感情を
妻なる人に
上陸し
天險にして
旅順城、
極東一の
つはものは
世界無雙の
四萬人、
油斷なくこそ

吾は滿足す
電報用紙に
まさりたる
短き文字に
言遣りつ
旅順の城に
人工の
是や難攻
堅砦ぞ。
要塞守る
手練ある
此所を生命の
守りける。

委細は文に
筆染めて
胸中無限の
つゞめつゝ
やがて戰地に
攻寄せぬ。
粹を集めし
不落てふ
それに籠りし
兵として
露西亞の勇士
瀨戸ぞとて
されば世界の

評判に
よも此城
無かりけり。
覺悟の前の
鐵壁に
死ぬを恐れぬ
唯だ進め、
眞の勝は

あらざれば
必ず落せ
亡びずに
合ふことあらん、
戰友は

日本いかに
落ちまじと
此難局は
事なれば
鬼籠るとも
軍人に
旅順落ちねば
なさぞとよ、
國の命の
落さずば
第二の
さる時は
後に絶たれ

強くとも
云はぬものこそ
はじめより
たとへ金城
日本の
切所は無きぞ
日本に
眞の勝の
危さぞ、
旅順艦隊
東洋艦隊と
我勇ましき
滿洲の

荒野に飢うる
落すべし。
安危存亡
旅順城、
我武士の

あらざれば
我血を以て
殿原よ、
大將の身の
幾たびも
現はしながら
强くして
攻あぐみたる

ことあらん。
旅順落ちずは
はかられず
こゝに死なんは
務なり、
必ず進め
此城を
我も死なんと
自重せず、
敵彈落つる

はげましぬ。
容易く落つる
日本軍、

されば必ず
帝國の
命なりけり
國守る、
ゆめ犬死に

我肉と
必ず落せ
希典は
其老顏を
戰線に

されど露兵も
氣色なし
弓張月の

氣は張りて
敵壘高く
見えにける。
露國の第二
來りけり。
屍の山を
落さねば
實に七尺の
越えざらん。
猛將勇士の
攻めければ
その霜月の
勝典の

心はいつも
よぢ難く
かくて旅順の
艦隊は
唯だ此上は
積むとても
國の命ぞ
屏風さへ
命を國に
氣をいらち
戰死の武士も
十餘り
弟なりける

勇めども
困じ果ててぞ
落ちざるに
日々に近づき
血の海や
いそぎて落せ、
殿原よ、
躍らばなどか
獻げよと
たゞひた攻めに
多くして
一日と云ふに
保典も

爾靈山下に
戰場の
忠義の爲に
いひながら
我にしあれば
せめてもの
言ひ放ちたる
さまを見て
爲ならば
思はぬものぞ
旅順城、
富を集めて
なりけれど

うせにけり。
露と消えたる
思ひかへ、
人の子多く
いとし子の
心遣りぞと
希典が
あはれ吾
必ず死なん
なかりける。
科學の智慧と
凝り成せる
科學も富も

愛子二人が
悲みも
軍人の習と
死なせたる
死にたるは實に
健氣にも
心すゞしき
此大將の
死すべしと
さしもに强き
大國の
金城湯地
忠孝の

山川草木轉荒涼
十里風腥新戰場
征馬不前人不語
金州城外斜陽

乃木大將金州城外之詩

義に勇みたる
せきかねて
力はつひに
頼みたる
ものとなりけり、
砲撃に
敵の守將も
降りけり。
戰勝の將軍と
親心
言はぬは言ふに
自ら
十里の戰場

精神の
靈の力に
勝たずして
爾靈の山も
それよりは
旅順艦隊
開城し
希典かくて
なりけれど
胸にたゝみし
增鏡、
『山川草木
風寒く

その通路を
物質の
敵の要地と
遂に我が
我が猛烈の
先づ亡び、
我が軍門に
名譽ある
子を失ひし
悲しさを
曇らぬ空も
さみしくて
馬は進まず

人默し、　　金州城外の　　夕陽に
立つ』と歌ひし　　からうたに　　千々の思を
籠めにけり。

旅順の戰。勝典、保典戰死の事

斯くて第一軍、第二軍の追々敵地に侵入するに連れて第三軍も出征することゝなり、五月三日、今まで留守師團長として言はゞ隱居役の樣なることを勤めたる希典は第三軍司令官に補せられ戰場に赴くことゝなりたり。始めは第三軍司令官は野津將軍（道貫）に申付けらるべしなど云ふ世評ありしが希典には命ぜられける。斯くて希典は直に出陣しけるに未だ宇品を出帆せざる途中にて長子歩兵中尉勝典が五月二十六日南山に於て戰死したる報知に接したり。勝典は第一師團第一聯隊の中隊長を勤めしが此日敵彈に當りて重傷を負ひ野戰病院に送られしが其所にて二十六歳を最後として失せけるなり。參謀本部の副官堀内大佐は勝典戰死の報を得て、之を希典の副官に電報しければ副官希典の前に出で勝典殿戰死致され候ひぬと戰地より申し來りし由唯今參謀本部副官よりの電報にて候と云ふ。希典之を聞きてしばしは詞も無かりしが、其電報を見せ候へとて手に把りて之を默讀したる後、妻なる人に左の如く言遣りたり。

カツスケ、メイヨノセンシ。マンゾクス。イサイテガミ。

之を聞く人、最愛の子を失ひて、而も顏の一筋だにも動かさざりし希典の沈勇に驚きけり。やがて希典は六月一日宇品を出帆し、航海中長山列島にて東郷艦隊を訪問し、同六日大連灣の鹽太澳と云ふに上陸したりしが其日陸軍大將に任ぜらる。是より先き第二軍（奧軍）は第一師團を旅順方面の敵に當るべしとて殘し置き、其外は敵の中堅を目指して北方に進みたり。希典の第三軍は此第一師團と尋で上陸したる第十一師團、第六師團、合せて三師團の兵を以て旅順を攻落すべき任務を負ひたるものなり。されば第一師團に屬したる保典も自から嚴父と共に旅順に向ふことにはなつてけり。希典、滿洲上陸の初は鹽太澳附近に軍司令部を

備へ敵の南下に置き、之と共に南の方旅順攻撃の準備に取かゝりしが、其後北方は敵兵の來るべき虞なかりしかば專ら旅順の攻圍に其兵力を集中したり。此頃希典金州の戰場を過ぎりて作れる詩あり。下に注す。

山川草木轉荒涼。十里風腥新戰場。
征馬不前人不語。金州城外立斜陽。

それと言はねど言外に戰死の子を懷ひける哀傷の意、自ら現はれたりとて之を誦する人、其情の濃かにしてしかも其詞のつよく潔さを感歎したりとなん。

兼ねては旅順は今年八月下旬までには必ず攻落すべし。然らば旅順艦隊も亡ぶべく、東郷艦隊も、しばらく鋭氣を養ひて靜かにバルチック艦隊の來るを待ち得べく、陸上に於ては旅順攻陷の功を擧げたる大兵を北に向はしめたらば敵軍を包圍すべき一翼となして餘あるべしとて、其積りにて攻掛け、旅順の守將ステッセル將軍に向ひ勸降書などを發し、いさゝか敵を悔り過ぎたる心持もありしが、敵もさるものにて守城の決心堅く、八月十七日ステッセル將軍より露國の名

譽、及び威嚴、並に旅順要塞の現狀に顧みれば、開城の相談など云ふは御協議に及び難きこと勿論なりとさつぱりとしたる返事あり。それより我軍に於ては同月十九日第一回の本線總攻撃を開始したれども、敵勢毫も衰へず。空しく一月を過ぎて九月十九日、第二回の總攻撃を開始したり。我軍にては此時まで數ば部分的强襲を試みたれども、露兵思の外頑强にて一通の事にては落城すべくも見えざりしかば、此度は口徑十一吋の臼砲を戰場に輸送し大砲撃を初めたり。此臼砲の威力には流石の露兵も大にひるみ出し、それよりは味方の攻撃もいさゝか都合善くはなりたれども敵は猶ほ執念くも退屈の色を現はさず、十月三十日に第三回、十一月二十六日に第四回の總攻撃を開始し、たとへば血の河をたゝへ、屍の山を積むとも必ず之を落さずんば已まずとの熱心を以てぢり〳〵と攻寄せしが十二月五日名高き二百三高地の占領を全くするに至りて戰爭の大勢頓に變じ今は旅順も守り難き勢とはなつたりける。されば此二百三高地を取られては敵は寄手に死命を制せらるゝ譯なれば數ば取られて數ば取返し執念くも抗戰を續け

たる其戰の中にて十一月三十日といふに兄勝典の死にたる後には希典の爲には杖とも柱とも云ふべき唯だ一人の子なりける陸軍少尉保典は敵彈に當りて斃れたり。今其戰死の有樣を記す前に、此頃山口に於て防長新聞の主筆たりし作間久吉と云ふ人の作りたる三典の歌と云ふを掲ぐべし。是は其頃名高かりしものなり。

阿兄勝典勇拔群。　阿弟保典武兼文。
乃父將軍名希典。　一家三典悉從軍。
將軍發日告遺志。　武夫捨命尋常事。
一人戰死勿出棺。　留待一旦兩個至。
果然南山激戰時。　冒險奮鬪失長兒。
敵彈無情旅順役。　又爲乃木折一枝。
接報將軍色不動。　將軍不痛聞者痛。
守棺夫人感如何。　夫人不慟國民慟。

君不見嗚呼忠臣三楠公。　殉難報國闔門空。
壯烈古今堪相比。　三典獻身取遼東。

此詩は誠に善く出來たり。少なくとも希典父子忠孝の志を寫し出して遺憾なし。

扨も保典が戰死に至りしまでの次第を按ずるに、保典が兄勝典と共に奥軍に從ひ、父に先だちて出征したりしことは前に述べたり。然るに奥軍は南山に於て敵を破りたる後、第一師團を殘して旅順の方面に當らしめ其餘は北方に進みたれば保典も奥軍と分れたり。其頃は第一師團長は伏見宮殿下にてましませしに、程なく大本營附に轉じ玉ひ、第一旅團長松村少將中將に轉じ第一師團長となりたり、中將は勝典の戰死したる上は、保典は希典に取つては一粒種なり。成るべくは之を保護して、忠義の武士の血脈を續けさせたしと思ひければ師團命令を以て保典に衞兵長を命じたり。是は戰線に露出する任務ならねば敵彈を蒙むることは割合に少なき位置なる故なり。然るに保典は、戰場に臨みたる初めより敵前に於て勇戰したしとのみ思ひ居りたれば後方に引下り衞兵長などゝ云ふ年寄じみたる役を勸

めんは、好ましからぬことなりと思ひしにや、某の如きものは左樣の重任に堪へ難し、あはれ御免を蒙りて猶ほ戰鬪部隊に連り御奉公を致し申さばやとて二月計りは彼是と言譯して猶ほ戰鬪に參加したり。希典も保典が衞兵長を申付けられたりと聞きて保典は學校を出たる計にて實戰の經驗誠に乏しきものなり、左樣の若輩が衞兵長の重任に堪へ得べき筈なしなどゝ謗やきしこともありしとぞ。されども松村中將は一旦出だしたる命令は故なく撤回し難しとて保典の不平に耳を貸さゞりければ保典も已を得ず赴任したり。かくて暫らく衞兵長を勸め居りしが勿論其志に非ず、是非とも戰鬪部隊に加はりたしと幾度も申出でしかば、さらばとて後備第一旅團友安少將の副官となりぬ。此旅團は其頃二百三高地と西海岸の敵に當り居りしものなり。然るに此日保典は旅團長の命を受け某隊の前進を促す爲め傳令指揮の任に當り歪頭山と云へる山の麓攻路頭と云ふ處まで赴きしに敵彈飛び來りて遂に戰死を遂げたりける。然るに此に不思議のことありけり。保典の戰死したる其夕なり。希典は第三軍の本營に在り椅子に倚りながら、

うつら〳〵と半睡半覺の狀に在りき。斯樣に椅子に倚りながら睡るは希典其頃の習なりき。此時希典の面前に現はれたるは保典なり。希典はきつとなりて、やあ汝は師團副官なるに、副官の肩章を付け居らざるはうろたへたる歟、それに明日敵城に對し大包圍を行ふべき支度最中の今宵に我陣中に來るは言語道斷なり夙く立去れと叱りたるに、保典は詞を返さず、悄々乎として影を隱くしたりと思へば是なん南柯の一夢なりける。然るに間もなく第一旅團副官より希典の副官に保典戰死の電話あり、副官も希典の心中を思へば餘り氣の毒にて直に口を開き言ひ難きことに感じたれども、さて已むべきに非れば希典の室に至り大將閣下、保典どのも名譽の戰死を致されたる由、唯今電話の參りて候ふと云ひけるに希典は「うむ、さうか」と答へし語聲いさゝか沈みたりしと云ふ。やがて人々も保典の死を知り、希典の哀傷を察しさま〳〵に申しけるに希典は不束なる子息二人ながら、皇國の御役に立ちたるは嬉しきことに思ふよと言ひしのみにて哀傷の氣色なかりけり。此時大本營の參謀總長兒玉源太郎も戰場に來合はせ居たりしが保典

の戰死を評して「乃木は善い事をした」と云ひぬ。是は戰場の常とは云ひながら人の子弟を多く殺したれば希典も心中堪へがたく思ひしなるべきに既に我子二人までも死なせたる上はそれにて少しは申譯も立つとて希典も心安くなりたるべしとの意とぞ。英雄の見る所、誠に符節を合はするが如し。希典其頃の樣子は全く我子を失ひしを哀まず、却て是に依りて希典の軍に屬し戰場の鬼となりたる人々の父兄に對し、少しは申譯も立つと云ふものなりとて寧ろ安心したる樣の人々の目に餘りたりと云へり。勝典の戰死したる頃なりけん。希典は陣中より內室に書を贈り、父子兄弟出陣する上はいづれも戰死の覺悟なり。されば一人や二人死したりとて其都度葬式をば出すに及ばず、三人ともに戰場の露と消えぬと聞きたらば始めて其取計ひ致すべきなりと申遣したりと云ふ。此事を傳へ聞きたる人々いづれも、希典の忠志を感じ、大將すら斯の如し、我等の子弟が皇國の御役に立ちて戰死したるを悲むは恥づかしきことなりとて勇み立ち、誰れ言ふとなく一人息子と泣いては濟まぬ

二人無くした方もある

と歌ひ出し、此歌第三軍に子を送り弟を出したる村々里々に諷誦せられたりとなん。保典戰死の後數日二百三高地の占領全く確實となりし時、戰死者屍體埋葬に付希典の幕僚會議を催し保典の事に付希典の意見を求めしに勝典は南山に死にたれば南山に埋めたり、保典も其死所たる攻路頭に埋められて然るべしと答へしのみ。人々希典の心中を推量し、他の戰死者とはいさゝか特別に取扱ひ「ビスケット」の空箱に遺骸を收めんとしたるに希典はいや〳〵某の子なりとて殊更に手厚く致されては外の戰死者に申譯なし、たゞ常の戰死者の如くしたまへとて死體は人並に土を蔽ひしのみなりしと云ふ。

希典の詩にて二百三高地を爾靈山と名づくること

かくて我日本の勇士九千人を傷け、三千人を殺して始めて所謂二〇三高地の占領を全くしたれば旅順の攻圍軍も此所を苦戰の絶頂とし此坂を越へたる後は戰爭も味方に都合善きものとはなつてけり。そは此高地の西方斜面は旅順の市街に向ひ、手に取る如く要塞の内部を俯瞰し得るを以て我軍にては此處に望樓と砲臺とを設け例の大口徑の巨砲を利用し旅順港内の敵艦並に倉庫、火藥庫、兵營などを砲擊し、敵に莫大の損害を與へたるを以てなり。されば此高地の占領を確實ならしめたることは攻圍軍に取りては諺に云ふ鬼の首を取つたる如きものなりしかば人々大に喜び、此山を何と名づくべきやとて樣々の評議あり。第一旅團長松村少將は鐵血山と名づけたらば宜しからんと云ふ。幾たびも取り、幾たびも取りかへされ多數の軍人が眼前に血を流したる忠勇無双の奮闘を親しく見たる少將が左樣の名を思ひ付きたるは宜なり。兒玉參謀總長は某たま〳〵參り合はせしときに落ちたれば兒玉山と名づけては如何にと云ふ。是には人々同意する氣色なし。希典默して人々の議を聞きてありしが、一詩を得たりとて傍人に示す。その人取つて

之を誦するに

爾靈山嶮豈難攀。　男子功名期克艱。
鐵血蔽山山形改。　萬人齊仰爾靈山。

とあり。人々感吟し、是なり是なりとて遂に爾靈山とすること、定めたり。

希典、陣中の振舞の事

凡そ希典の旅順在陣中の振舞を親しく見、若しくは傳へ聞きたるものは皆希典を以て古名將の風ありとて歎賞せざるはなかりける。たとへば希典此時は既に六十翁に近かりしかども部下の執務中は夜半に至るも就蓐したることなく、靜かに椅子に倚りて其用務の果つるを待ちたり。食事なども下士以下同樣のものにて宜しとて別段註文せず、管理部より司令官にとて特別に定外のものを供ふれば是は私の事なり、其費用は自辨にすべしとてわざわざ其筋の役人に自身私用の金を送りたり。營中に於ては嚴寒にも火を用ひず、「ビスケット」の空罐を火鉢の代に用ひ、

それに螢ほどの火を入れ置きしのみ。從卒、餘りの事なりと思ひ炭をつがんとしたるに希典は手をふりて某には煙草に用ふる火だにあらば足りぬ、第一線に進みたるものには火氣なきぞよとて之を止むるが常なりき。斯樣に士卒と辛苦を共にしたるのみならず、一日たりとも軍司令部に引籠り居たることなく風雨の甚しき時にても馬に跨りて前線を巡視し、聯隊長より悉しく戰況を聞くを常としたり。されば後には第三軍中にて最も旅順の地理に精通したるものは軍司令官其人なりと云はるゝまでになりぬ。斯樣の時にも旅團長、聯隊長などが折角大將の御出でなりとて甘き物などとゝのへて饗應するものあれば希典は却て機嫌惡しく「戰場にて斯樣なる御馳走を喰べるは不埒なり」とて叱りしこともありしとぞ。希典は武士の習とは云ひながら、天皇陛下の赤子を多く犧牲としたることを悲み、自身も潔く戰死して御申譯をなさんと思ひしにや如何なる危險をも物ともせず、砲煙彈雨の下をくゞりて諸陣を見廻り危きをも數ばなりしかば參謀の人々は大將に萬一の事ありては士氣も沈むべしとて希典の後を追ひ切諫して僅に危險

界を脱出したることもありしと云へり。されど大將自ら命を惜まざる模範を示したれば軍人皆怯懦を恥ぢ、いづれも勇氣凛然たりき。

旅順陷落、希典、ステッセル會見の事

二〇三高地、既に我手に入りしかば、我が大口徑の巨砲は益す其猛威を逞くし、十二月十一日には旅順攻圍の大目的たる敵艦破壞の功を收め、旅順艦隊は全く擊沈せられたり。此報知に接したる東郷艦隊の喜悅知るべきなり。同十五日東鷄冠山北砲臺に於て守城軍第一の英傑コレドラチエンコ將軍我砲火に斃れ、露國の戰志遽かに衰へ城中日軍の砲威に震慄す。同廿八日二龍山砲臺我手に陷りてより旅順要塞の位置益す救ふべからず、明くれば明治三十八年正月一日ステッセル將軍より軍使來りて降書を希典に致し、此に始めて旅順の陷落を見るに至れり。斯くて希典は翌日の天明軍使を露軍に遣はし降參を聞屆けたる旨の返詞を送り、此日午後一時兩軍全權委員水師營に會見し、午後九時四十五分と云ふに開城規約

の調印を終へ、同七日希典、ステッセル同所に於て會見したり。此時ステッセルは希典に向ひ二人の愛子を失ひたるを弔ひ哀悼の意を表したるに、希典は愚息等の戰死は予が彼等に取て無上の名譽とする所なり。予は彼等が國の爲に身を献げたるを誇るものなりと詞すゞしく答へければステッセルも感歎の色を現はしたり。扨種々の物語に移りステッセルは戯の様にして將軍は恐ろしき人なり、廿六珊の砲彈などにて善くも我等を困らせたまひけりと云ひしに希典すかさず、さのたまふ足下も中々の人なりけり、海の中の魚形水雷を陸上に引揚げ六百米突の遠距離を飛ばせたまひし御手際は隨分怖ろしく存じたりと笑ひながら答へける應酬の敏捷なるには此人にして此技倆ありやと傍に在りしものは訝りながら其當意卽妙の才を感じたるもありしとぞ。ステッセルは此日其愛馬を希典に贈らんとしたるに希典は形を正し、詞を改め、貴殿の愛馬も貴殿既に開城の上は日本政府の物となりたるものなれば予は私に之を貴殿より受くる能はず。日本の將校は官物を私用することなしとて其好意を謝絶したり。此嚴正にして威嚴ある返詞にはス

テッセルも些か赤面の氣味ありしと云ふ。

旅順戰爭の希典に與へし感懷如何

世には旅順の戰爭は希典の心に醫しがたき一種の創を與へたりと云ふ人なきに非ず。其人の說に希典の旅順攻擊は餘りに短兵急なることにて、實はあの様に多數の人を殺すには及ぶまじかりしを、あせり過ぎて失策をなしたりとて戰略上より非難するものあり、其頃の外國新聞などにも旅順の惡戰苦鬪は餘り殘酷に過ぎたりと論じたるものもあり。希典の耳にも左様の事が聞こえたれば例の何事も自ら責め、自ら過を引く人の癖なれば我惡しかりと思ひつゝ悔恨の意あり。是ぞ希典の心の大創なりきと云へり。されど此事は前にも記したる如くバルチック艦隊の東航、益す切迫し來りし上はたとへ少々は無理をしても旅順を攻落さねばならぬ絶對的の必要ありし故、此の必要の爲に小の虫を殺して大の虫を活かす手段に出でしものにて世評は何程惡しくとも希典の心中に於ては敢て自ら疚しと思ひ

しことはあらざるべき歟。其上自身の愛子二人まで殺したる程なれば人に求めたる程の犧牲は自身も献げたれば其良心もやゝ滿足したるべし。但し兵家の常道より云へば當然の事なりとも人の子弟を多く殺したる一事は其父兄に對しては誠に氣の毒なる事にて希典も情に於ては堪へ難く、忍び難く感じたるならん。されば

こそ希典凱旋の時の詩にも

王師百萬征强虜。　攻城野戰屍作山。
愧我何顏看父老。　凱歌今日幾人還。

と云へり。希典凱陣して宇品に歸りし時も或人出迎の爲め希典の乘りたる船に行き、其居間を尋ねたるに人影なし、參謀、副官などに問ひたれども知らずと云ふ。斯くて船中隈なく尋ね廻りたるに希典はとある船室の隅にうづくまり居たり。其人進んで凱陣の祝詞を述べけるに希典は頭を搔きながら僕は人の子弟を多く殺して歸陣したるものなれば、何の顏ありて諸君に見ゆべき。僕の一身、若し僕の意の如くするを得ば簑笠にて身をかくし、此儘裏道よりこそ〳〵と遁げ行きたく

思ふ程なりと言ひしと云ふ。希典の痛恨知るべきなり。さりながら是は人情の上の話なり。軍人たる職務の上より云へば希典の胸中は至て清しく、我は其爲すべきことを爲したりと思ひ居りしことならん歟。筆の序なれば些か此に之を論じ置くものなり。

旅順の戰爭中、希典の妻の振舞の事

日本人民が旅順は何日落つる乎、旅順艦隊は何日滅ぶべき乎としきりに勝報の來ることを待ち望みける頃なりける、芝の琴平神社に日參して皇國の勝利を禱る婦人ありけり。衣服などは至て質素なりしかども祈願の樣、誠に殊勝なることにて熱心面に現はれしかば、祠官も軍人の妻なるべし奇特の事よとて內々其身元を探りしに、是は別人ならず、乃木大將の內室なりと知れければ、さる高貴の夫人にしては誠に質素の身裝なりけり、奥ゆかしき家風なりとて感心したりとぞ。其頃東京には貴婦人社會に愛國婦人會と云ふもの起り、世に時めける令夫人令孃など

云ふものを始め軍人の妻室なども之に加はり、女ながらも軍國多事の今日には空しく日を送るべきに非ずとて、物を贈りて軍人を慰勞し、出征軍人の家族を保護するなど様々の事に骨折りけるが、希典の内室もその幹事と云ふ人に勸められて入會はしたれども、評議員など云ふ世間に名の出る役には何程勸めても謙退してならず、その集會にも總會など云ふ大切の場合の外は大抵は出席せず、おとなしく、つゝましやかに目立たぬ様に振舞ひたり。但し篤志看護婦會といふは仕事も地味なれば其方には數ば顔を出したり。斯樣の人なれば二人の子息の戰死したる時も人に對しては婦人は有勝ちなるくり言など言はず、夫が數多の部下を殺したるは御上に對して申譯なきことなれば、二人の子供の死にたるは、せめてもの事にて候と言ひたるのみなりしかば、希典にして此室あり、諺に云ふ似たもの夫婦とは誠に此人々の事を云ふべかりけりとて感ぜぬものこそ無かりける。

（二〇）希典凱旋、學習院院長となること

敵の塞下に
とゞめられ
戰友の
世にかくれなき
うらやましくも
思ひける
やうやくに
八月の苦戰
明治の三十
八年の
曉に
とよさかのぼる
旅順の城を
落しけり。
落ちければは
三箇師團の
其戰勝の
鋒先を
奥深く
籠りし敵に
遼河をさして
進みつゝ、
人類の
生まれ出たる
例のなしと
歌はれし
北に向ひし
武名をば
第三軍も
功成りて
その元旦の
日と共に
かくて旅順は
大兵は
滿洲の野の
さし向けて
地球の上に
初より
かの奉天の

大戰の
極寒の期の
解けやらず、
輸送の車
滿洲の
意氣天を衝く
動き出で
中より進む
奥の軍、
後に進む
豫備として
敵を前後に
競ひたる

その一陣に
過ぎたれど
馬の蹄の
滑らかに
二月の末の
百萬の
右より進む
野津の軍
極左に進む
川村の
戰線延びて
夾み
規模宏大の

加はりぬ。
氷はいまだ
音高く
兵用ふべき
事なりき、
王師堂々
黑木軍
左に進む
乃木の軍、
その一軍を
五十餘里
餘さじものと
戰爭に

比べて見れば
シーザルや
又近き世は
戰記さへ
云ふべかりけり。
大戰に
火花を散らし
不落とて
落せし勇將
しるかりと
世界の史に
なりにける。
奉天の城に

古の
我日本の
佛蘭西の
小人の島の
希典は
其一軍を
戰ひて
敵の誇りし
猛卒は
其勇名は
朽ちぬ名を
されば彌生の
日の御旗

羅馬の大將
家康や
大ナポレオンの
爭ひと
此空前の
指揮しつゝ
流石に難攻
名城を
野戰の功も
いや高く
止むる人と
半には
高く掲げて

人は皆
歌ひたゝへて
東郷は
意氣安閑と
甲斐ありて
二十八日
海戰に
實に勝敗の
一縷の
何の苦もなく
冷やしけり。
流石の敵も
結びける。

我天皇の
勇みける。
旅順の落ちし
逸に居て
此年五月
兩日の
露西亞帝國
分るゝは
望を懸けし
亡ぼして
勢此に
我を折りて
かくて功成り

萬歳を
それさへあるに
其日より
勞を待ちける
二十七
對馬が沖の
君臣が
是あるのみと
敵艦を
世界の膽を
極れば
つひに和議をぞ
名を遂げし

凱旋の諸將
船出して
功に誇らず
殺したる
自ら責むる
世に知れて
猛き武將の
此人は
君子なりきと
人多く
名はいや高く
ことあれば
殘る血肉

勇ましく
歸りし中に
名に恥ぢて
『我罪あり』と
謙退の
峨々たる巖に
心こそ
實に今の世に
驚きて
掩はんとして
なりにけり。
二人の子息
あらざれば

旅順大連を
希典は
『人の子多く
懺悔して
誠の心
花は咲く、
やさしかりけり、
ありがたき
ゆかしく思ふ
現はるゝ
希典思ふ
戰死して
乃木の家名は

我世にて
木に竹つなぐ
ことはりて
寂しく世をば
なき身にも
天皇の爲め
祭壇の
不平を言はず
軍令を
其健氣なる
いじらしゝ
若し彼等は
勳章に

斷つべかりけり
えせ業は
老いたる妻と
送りけり。
忘れ難きは
世の爲めと
犧牲にして
つぶやかず、
守りて死にし
志、
我が殺しに
骨朽ちて
身を飾りつゝ

養子てふ
我は爲さじと
唯だ二人
此世に望
國の爲め
身を國といふ
惡るびれず、
絶對的に
青年の
思ひやるだに
非ずとも
老いたる我は
榮爵を

我子にもあらぬ
是や實に
枯れぬと
恥づかしや、
我にしあれば
軍人の
心行くばかり
散ぜんと
行廻りつゝ
あらはれて
田夫野人と
父兄ぞと
胸中つゝまず

他人に
一將功成り
云ひしからうたの
死ぬべき所に
此上は
後に殘りし
慰めて
戰死の兵の
とむらひし、
大將の身の
あなどらず
心を置かず
打明けて

殘して死なば
萬骨の
心に似たり
死なざりし
我爲め死にし
父母を
我鬱懷を
古郷を
言に情
へりくだり
我戰友の
へだてなく
語らひければ

共に泣く
子を失ひし
多かりき。
家の主人を
身となりて
ありとし聞けば
訪らひて
皇國の爲めに
幸あれと
癈兵院は
一生を
五體不具なる
ものなれど

其同情を
悲を
それのみならず。
失ひつ
鰥寡孤獨に
希典は
恩賜の金を
身を棄てし
思ふ誠を
戰場に
からくも得たる
殘生を
兎は死して

感謝して
忘るゝものも
かゝり子や
世に賴みなき
泣く人の
人に知らせず
分け與へ
勇士の家に
あらはしき。
萬死を出でゝ
武士の
詫びしく暮す
犬烹られ

敵國破れて
世の習、
武功はいつか
自ら
熱きにつきて
多けれど、
身を癈兵の
慰めて
感謝の中に
くらせども
絶ゆることなく
來りぬと
さみしき顏も

謀臣の
國を守りし
忘られて
情の薄き
冷たきに
昔忘れぬ
友にして
望なき身も
ながらへて
心づくしの
音づれき、
聞く其時は
春めきて

顧みられぬ
軍人の
訪ひ來る人も
顏の色、
離るゝ人の
希典は
常におとづれ
國民の
心ゆたかに
贈物
されば大將
癈兵の
院中自然に

にぎはひぬ。
家は華族に
たゝへられ
羨む人も
思ひ棄て
皇國の爲に
極めたる
破れし履に
光榮も
我今生に
國守る
みがき〳〵て
思ひてし

身は大將の
つらなりて
此世の榮華
ありけれど
此殘骸を
用ひんと
人の爲には
殊ならず
ふりたる衣に
望みなし、
大和男兒の
後の世に
その赤心の

官高く
伯爵の殿と
不足なしと
身を無きものと
必ずや
心すゞしく
大官も
伯爵と云ふ
似たりけり。
唯だ此上は
精神を
傳へんものと
雲井まで

聞えてければ
たまはりて
教へ參らせ
のみならず、
なれと仰せの
帝室の
我子の如く
やさしくも
大御心を
くだきけり。
驕奢にふける
たけかりし
返さんものと

かしこくも
竹の園生の
候へと
學習院の
ありければ
藩屏たらん
思ひなし、
教へ導き
安めんと
昔し羅馬の
其國を
剛健粗樸の
思ひつゝ

玉の御詞
公達を
みことのらせし
院長に
四民の模範
人の子を
たけく雄々しく
我君の
日夜心を
老ケトー
古りし昔の
世のさまに
直ぐなる心

一筋に
心の儘に
老骨と
古の武士の
誇りたる
身に宿れとて
當代の
國運を
若殿原は
少年が
耽溺の酒に
夢にだも
忠義無雙の

世にへつらはず
振舞ひて
若殿原に
精神を
今の貴人の
いそしみし
老ケトー。
その雙肩に
古の
其老雄を
醉ひにける
學ぶことなく、
老將の

おもねらず
時世後れの
笑はれき。
物質の富に
若殿の
希典は實に
我が日本の
擔ふべき
羅馬の國の
侮りて
墮落のさまを
ひたすらに
たけくやさしき

精神を
學の窓に
映らんと

模範としつゝ
將來の
思はぬものぞ

はげみなば
國の光は
なかりける。

希典奉天の戰に加はること

旅順陷落の後希典は其第三軍を率ゐて北進し我全軍の極左翼となり奉天の大會戰に參加せんとて三月一日新民屯に入り、同月八日奉天の北方なる鐵道を切斷し、同十一日日本軍奉天占領の日まで奮戰したり。其趣は歌に述べたれば此には略しぬ。希典は旅順より此會戰に赴くとき豫じめ死を決し、出陣の節文を鄕友桂彌一に與へ、此度は生きて還らぬ積なればとて身後の事ども申送り、乃木家は某の死と共に絶家せしむる心得なれば其趣に取計はるゝ樣貴所の配慮を煩はしたしと云ひ送りたり。さりながら此戰も思の外に强敵に遇はず屍を馬革に裹む志も遂げざりける。尋で五月二十七日、二十八日に日本海の海戰あり、露國艦隊、

事實に於て全滅したり。是れしかしながら希典が先づ旅順に隱れし敵艦を破壞し置きし故、海軍に餘力を生じ東鄕の働も自由なるを得し故なりとて、心あるものは此海上の大勝利こそ實に旅順陷落の結果なりとて今更の樣に希典の苦心を感じたりとぞ。

希典陣中振舞の事

希典の旅順城攻の頃の振舞は前文にも記したれども、此に奉天合戰の記事を終りたるにつき、旅順奉天陣中の事を併せて注すべし。たとへば滿洲は蚊多き所なれども希典は蚊帳を用ひしことなし。人々餘りにうるさく螫して候へばとてそれを用ひんことを勸むるにいや〳〵第一線に進みたる人々の辛苦を思へば左樣の事はなすに忍びざる所なりとて首を振りて聽かざりしとぞ。之を見もし、聞きもしたる人、實に此大將は士卒と苦樂を共にすと云ひし古の名將に似たりけりとて感歎せざるはなかりけり。希典は又官用と私用の區別を嚴重にし、書簡なども私信の分は決して司令部用の卷紙、罫紙の類を用ひず必ず自辨したり。陣中風紀の事に付きては希典は極めて嚴重の人にて餘興に仁和加など催すことありても、男女の情愛に拘はりたる柔弱のさまなどを演ずるものあれば演劇中と雖も、左樣の事は止め候へと大喝して中止せしめたることありしかば畏ろしき大將かなと思ふものもなきに非ず、されど時としては狂歌など作りて打ち興ずる事もあり。七月十四日法庫門を占領したりし時、第六旅團長小泉少將の陣中にて多數の鼈を捕らへ其大なるものを選びて希典に贈りたるに希典大に喜び首を傾けて何事をか打案ずる氣色なりしがやがてすら〳〵と左の一札を書きて少將に與へたり。

書翰拜讀仕り候尊體愈御勇健御部下英氣勃々の由欣喜之に過ぎず候

連日途上卽目

夕立にぬれつゝ急ぐ旅人は
行手の小川かち渉るらん

大鼈特に數多御惠贈多謝、早速手料理仕り僚友打寄り賞翫可仕候。

萬歳を祝うてお禮申すなり
舌皷打つ龜の味ひ

又

生捕て第一戰の贈り物
スッポンぽんと舌皷打つ

七月十五日　於法庫門　希典

小泉賢兄　尊下

之を聞く人、英雄の胸中、自ら閑日月ありとて、其風流をゆかしがりし人もありけり。希典は無情漢に非ず、酸いも甘いも嚙み分けたる人なり。此頃講談師桃川若燕と云ふもの歩兵第三聯隊第二中隊一等卒として從軍したりしが希典或日若燕に向ひ汝は或る場所に遊びに行きしやと尋ねたり。若燕之を聞きていや〳〵參り候はずと云ふ。希典から〳〵と笑ひ、傍の料紙を取りて「戰さにや強いが色氣は薄い、それぢや御前も唯の人」と書き與へたりとぞ。但し是は奉天の大合戰

を終り法庫門占領以後の話にて媾和談判も既に開始せられたる後の事なれば將士共に斯樣に打くつろぎたる逸興もありしことならん。

○

法庫門西山卽目

劫餘風物不堪酸。　處々炊煙暮色寒。
往事茫々皆似夢。　百年誰記招魂壇。

此詩は後日法庫門西山にて招魂祭の催されし日希典の作りしものなり。

希典凱陣の事。郷里に立寄ること。希典の妻の健氣なりしこと。

希典は明治三十八年の暮まで滿洲に在陣したりしが、それより宇品に凱旋したり。此時なりけん郷里の長府にも立寄りしかば功勳世を蔽ふ大將が錦を著て故郷に歸るなり。その郷黨たらんものは大に之を歡迎せざるべからずとて旗を立

て、遠く郊外まで迎へたるに、希典は從者も連れず、一人にて人力車に乘りながら入り來りしが此體を見て喜ばざる色あり、長府中學校生徒の路傍に整列したるあたりにて車を下り丁寧に挨拶し、自ら號令を掛けて分列式を行はせ、其儘舊主毛利子爵の別邸に投じ、扨來訪の客に向ひ長府の風俗も近頃は虛飾に流るゝやうに覺ゆなど物語り、翌朝はとく起出で自ら風呂水を汲み、藁草履を穿ち、自身に町に出でゝ「朝日」と云ふ煙草を買ひなどしければ鄕友の中には古の乃木氏其儘にて少しも變りたる所なしとて微笑したるものありしとぞ。斯くて希典いよ〳〵東京の宅に歸ると云ふ、其前夜なりけり。或人希典の留守を尋ね、明日は大將歸宅の事と承る、內君に於ても歡迎の御用意あるべきことゝ存ず、如何なる御まうけありや漏らしたまへと言ひけるに、內室は格別の支度とては候はねども厩ばかりは善く〳〵掃除いたし置き候ひぬと答へしと云ふ。希典の住宅は粗末のものなれども厩のみは家に似合はず立派のものにて、蚊の出づる頃には厩に蚊帳をつりていたはりぬ。斯樣の心掛なれば內室も厩の掃除をなして希典を迎へけるなり。希典の內室は斯く云ひたりしのみにて戰死の子の事は言出さゞりしかばその人は其健氣なる志を感じけり。內室は是より先き二子の遺骨の家に屆きし時神官を招き、かたばかりの祭を行ひしが、其時はら〳〵と涙をこぼしたり。されど胸中萬斛の涙も唯だ此數滴に籠めたるのみにて常にはすこしも哀傷の色を現はせしことなかりき。

希典、乃木家絕家の覺悟の事

希典凱陣の後は功勳一世に高く、君の御覺もめでたく世の用ひも重く、是や誠に名を揚げ家を興すと云ふ豪傑の本望を遂げたることなれば此上は乃木の家名を永續し長く君恩を後世に傳ふるこそ善けれとて親しき人々より養子の事を勸めたれども希典ははか〴〵しき挨拶もせず兎角は言延ぶるやうにして日を過ごしたり。寺內大將（毅）なども希典とは莫逆の間なれば自身も勸め、兒玉大將（源太郎）にも相談し、希典の竹馬の友なりける桂彌一と云ふ人などとも話し合ひ同人並に

梶山鼎介、諏訪好和の三人にて希典の長府に歸りし時懇ろに說きもし、勸めもしたれども希典はさらば貴說に從ひて養子すべしとは云はざりけり。寺內大將は希典の內室にも說き試みたれども內室は良人は御存じ通りの氣質に候へば私より申したりとて聞入るべくも候はねば貴所より直ぐに良人を御諭したまはりたしと云ふのみなりき。希典の內室或時さる所にて皇后陛下（今の皇太后陛下の御事なり）に謁見したるに汝等夫婦は子息を失ひたる後は寂しく暮らすべしと思召さる、此後は養子にてもする心なりやと御諚ありしに內室は畏まりて唯今まではさる思立も候はずと答へたり。是は日光にて拜謁したる時の事なりとも漏れ承る、但し詳なることは知らず。斯樣に希典が友人の勸めを聽かず、養子の說を拒絕したるには仔細ありと覺えたり、希典は兼て養子と云ふもの、弊多きことを知り、且眼前に同姓の親族の中にも養子をしたるが爲めに不幸に陷りしものあるを見たりければ、人情の輕薄なる今の世に、我子にもあらぬ人の子を養ひてさる覆轍を履むのみならず、皇室の藩屏たるべき華族の家に其品位を汚すべき人物を

容るゝは不忠の至なりと思ひたり。是れ希典が養子をすることを肯んぜざりし一の理由ならん。希典は武人に似合はず讀書家なりしかば、淺見綱齋が養子論に養子と云ふは木に竹を繼ぐやうなるものにて、道理に合はぬことなりと云ふ說あるを讀みて成程尤なることゝ思ひ、會澤安の下學通言にも其頃の士人が養子と云ふことをして祖先の血統を絕ち、素生よろしからぬものに家を繼がせて種姓の純粹を害することを憤りて記しあるにも同感し、我子ならぬ子を養はんよりは寧ろ絕家するに如かずとて漢文にて養子論一章を草し、友人などにも見せしことあり。其文には

天祖統を傳へ、日胤歷々たり、人臣も亦皆祖を尊み宗を敬ふ。降て中世に及びても尙氏宗あり以て族を緝め先に事ふ。父子の親既に惇く祖を念ひ德を修めて永世誼れず、施いて國郡に及び、武士も亦能く家督を崇敬し、家衆を總領したり。是を以て人々自ら重んじ風俗淳厚なりき。然るに四海廛沸するに及びて宗を覆し族を滅す者比々として踵を接し人皆身を輕んじ報本反始の義を忘れ血胤

の重ず可きを知らず、徒らに家門を持して他姓の子を養ひて嗣となすに至れり。かくては竹を以て木に接ぐが如く以て祖先の後を承く可からず。路人を以て父子と爲さば、父子以て路人たる可し。家門あるを知つて血胤あるを知らず。人情澆漓、風俗薄惡、父を逐ふ者之あり父を弑する者之あり父子の大倫殆ど熄みぬ。

とありけり。是は希典一家の見識と云ふものにて、此見識を意地強く守りたる所が則ち希典の價なり。是は希典が養子をなすを肯んぜざりし第二の理由なるべきか。されど希典の心中を解剖したらば猶ほ此外にも希典が乃木は絶家と覺悟したる大なる理由あるべきか。そは前に記したる「愧我れ何の顏ありてか父老に看ん。凱歌今日幾人か還る」と云ふ二句の意を翫味したらば讀者必ず心に會する所あらん。

希典戰死者の父老を慰むること

希典は第三軍に加はり旅順其外にて戰死したる部下の將士の遺族に對しては深く其哀傷に同情し、暇さへあれば其人々の鄕里を尋ね、父老、子弟、親族、朋友に會し之を慰めたり。さる時は必ず余は二人の子息を戰場に失ひたれども是は身、軍職に在りて常に至尊の恩寵を蒙り居る身なれば斯樣の御奉公も當然の事なりと云ふべけれども、御邊等の子弟は然らず、唯だ日本國民として護國の責を負ひ、軍籍に列りたりと云ふのみにて、格別の御恩も蒙らぬに一死を以て國民の義務を盡したること我等に勝りたる忠勤と申すべし。將校は國家より俸祿を賜はりて不足なく暮らせば其恩返しに命を棄つるも尤なり。御邊等の子弟は將校に同じからず、是は誠に身に何の利する所なくして大君の爲に死にたるものなれば一點の私心なき忠義と申すべし。さる忠義の青年を希典不肖にして多く殺したるは誠に申譯なきことなりける。希典は御邊等の子孫を殺したり。されば割腹して其罪を謝せざるべからず。さりながら今日は希典の死ぬべき時に非ず。他日希典が一命を君國に献ぐる時もあるべければ、御邊等は其時にこそ希典が御邊等に其子弟を

殺したる罪を謝したるものなりと心得られよとて熱心に語り出るを常としたりしかば之を聞く田夫野夫も大將斯く申さるゝ上は我子弟は犬死に非りけりとていづれも滿足したりと云ふ。田舍に演說會などありて希典も其席に列ることあり、大將にも御演說を願ひたしと司會者より請へば希典は謙退して敢て演壇まで進まず、其下に突立ち、俯目勝ちにて、やうやく口を開き『希典は諸君の子弟を殺したり』と云ふ聲は既に曇りぬ。斯く言ひしのみにて頓には次の句も出でず、無量の感慨に胸迫りて一語を發せず、辛うじて顏を揚げて演說をつゞけんとするに希典の眼はあやしく輝きて睫には露を宿したり。之を見るもの恰も强烈なる電氣に打たれたる如く、一座肅然として形を改めはては唏噓の聲さへ聞えぬ。是は或る所にて乃木大將の演說と云ふものを聞きし人の眼のあたり見たりとて語りし所なり。斯樣に希典は、到る處に戰死者の遺族を慰め歩きしのみならず。戰時の爲めにとて碑文などの染筆を賴まるれば何時も快く承知し直ぐに書き與へたり、戰死者遺族の中には眞の鰥寡孤獨もありて或はかゝり子を失ひ、或は稼

人に死なれ其日の暮しにも難儀するものありなど聞けば希典は人知れず物を贈り、金を與へて其窮乏を救ひしことも多かりしと。

希典數ば癈兵院を見舞ひたること

希典は斯樣の心掛なりしかば癈兵院にも深き同情を有し、毎月一二度必ず訪問したり、此院に大官の訪問など云ふことあれば、大抵は前以て院に通知あり、院の役人も恭しく出迎へ奔走大方ならぬが常なれども希典の訪問は左樣の事なく、何時も出し拔けに飄然として來る。さる時は事務員其影を見てさては大將來ませりとて案內などせんとすれば希典は微笑みながら案內は善く知りぬ、配慮に及ばずと手を振りて之を止め、獨り進みて癈兵の居る所に行き近頃は無事に暮らさるるやなど云ひて恰も友人同志相語る如く打解けて近狀を問ふ。されば癈兵も大將の訪問こそ全く儀式的の御見舞に非ず、眞の御見舞と云ふものなりとて其情の厚きに感泣するものもありけり。斯く數ば訪問する中にも三月十日の陸軍記念日に

は必ず希典の影を見ざることなく、癈兵の部屋毎に其やさしき顏を出して「ドウカ〳〵」と慰めあるきし希典の風采、今も眼前に浮ぶやうに思はると院の役人は語りけり。希典は揮毫の謝禮などに田舍より貰ひたるもの、下野の別莊にて作りたる野菜の類なども大抵は癈兵院に贈りて、國家の爲に不具になりたる勇士を慰めけり。されば乃木家よりの贈物と云へば卵、鮎、山芋、干柿、岐阜提灯など云ふさま〳〵のものありて、其贈物のある毎に院中皆希典の懇志に感激せざるはなかりしとぞ。

希典が學風の事、素行會の會員となること。並に吉田松陰、山鹿素行崇敬の事。

希典は玉木文之進の一門にて、しかも其弟子なり。玉木文之進は吉田松陰の叔父なり。吉田の家は山鹿流軍學師範を以て長州侯に仕へし家なり。玉木は水戸學派の諸書を愛讀し、殊に好んで淺見綱齋の靖献遺言を讀みし人なり。其上希典の少年時代に學びたる長府の集童館と云ふ學校の教育も毛色の變はりたる學校なり、明倫館の教育も尋常のものに非ず。人間の腦髓は不思儀のものにて少年時代に一たび鍛錬して固まりたるものは壯年、老年に及びても、其通りに進み行きて其人の一生の方向を定むるものなり。たとへば水の如し、山に在る清泉一たび東に向て谿谷を下れば、次第に衆流を合し、益す其方角に向ひ、果ては何ものも抵抗する能はざる勢を以て進むが如し。之を現代の教育學にて暗示(Suggestion)の理法と云ふ。筆の序なれば此理法を經とし、希典の經歷を緯として此に些か希典の學術を論ずべし。希典の少年時代は學問は學問、事業は事業として二に分けてゆるゆる學びもし、行ひもすると云ふ悠長なる時節に非ず、學びたることは直ぐに行ひ、行ひたる所は直ぐに學びたる所に照らして判斷すると云ふ學問と實行との間の頗る切迫したる時代なり。されば吉田松陰が其流儀の祖山鹿先生の書を講ずると云ふも玉木翁が水戸學の書物を讀むと云ふも、之を講じ、之を讀み、ゆるゆる之を批判し而る後に是非を擇び、異說をも考へ、棄つべきは棄て行ふべきは

行はんなどゝ言ひて學問を學問として仕舞ひ置きたるに非ず。其講じたる所は直ちに自身に應用し、其讀みたるものは直ちに眼前に實現せんと欲したることなり。其切迫の狀況を物に譬ふれば飢ゑたる人の食物に臨むが如し。腹がふくれて居れば食好みもし、あれが甘いの、是れが不味いのと贅澤を云ふことにもなれども、飢ゑたる腹ならば何にても甘しと思ふべく、又何にても消化し得べし。學んで而して後に行ふには非ず、行はん爲に學ぶ世には、學問も批評の、考證のと云ふ悠長なる筋には落ちず、讀んで我心を益し、我行を培ふべきものあれば、直ちに之に感服して其儘實行に取かゝること故、儒者のする樣なる學問はせぬことなり。山鹿素行の著述なども批評家の眼より見ればさまで高尙なるものに非ず、水戸學者の說と雖も缺點なきに非れども批判の爲に學問をせず實踐躬行の爲にする人に取りては其中に有益の智慧と教訓とを見出し得べきは勿論なれば吉田は山鹿に感服し、玉木は水戸學を喜びたり。胃の健全なるものには麥飯も甘し、今日、只今實行すべき智慧と教訓とを求むる心の謙遜なる人には山鹿の書、水戸學派の著述と雖も何ぞ其心醉を促すべき甘味なしとせんや。是れ吉田、玉木の感服したる所以なり。此學問の傾向は長府集童館の教育にも現はれたり。たとへば集童館には對策と云ふことあり。生徒中より教師の指令にて生徒の一人を選び先づ楠公の遺命狀と云ふものを讀み聞かせ、扨後に父、君命に背きたり、君、子に命じて父を伐たしむ、子たるもの君の命に從て父を伐つべきや如何など云ふ實行上の問題を出して生徒の卽答を求め先生其事理の當否を批判す。是皆學ぶ所は直ちに行ひ、行ふ所は直ちに學ぶ所に照らすべしとする切迫なる教育法より割出したるものなり。楠公遺訓、楠公壁書など云ふものは史學の批判より云へば大抵は埒もなき拵物なり。さりながら其言嚴正にして、之を眞のものとして信じて讀むものは展誦の間凜然として其義氣に感ぜざるものは無かるべし。たとへば北畠淮后の筆なりと云はれし關城の書は後世の贋作に相違なけれども、それを贋造と知らぬ人は讀みて泣かざるものは人に非ずなど云ふなり。集童館にては學問は今日學びて今日行ふものとしたることなれば、楠公の遺命狀と云ふも

のも批判の眼を以て見ず、唯だ武士の寶典として之を尙びたり。其上學問と實地と離れぬ樣にしたれば書生の心には批判、比較の餘裕なく、唯だ學ぶ所は則ち行ふべしと思ひ、實行の工夫にのみ餘念なかりき。斯樣の次第にて希典の頭は少年の時代より批判に短く、實行に長じたるものとなれり。それに希典の學びたる頃の明倫館の敎育も江戸の聖堂などゝは反對にて學者風に子弟を育てず豪傑風に育てたり。そは其頃明倫館にては宋人樂雷發の烏々歌と云ふもの流行し、今の校歌のやうにして希典なども友人と共に滿酌痛飲の後每度之を歌ひたりと云ふにて知らるゝなり。下に烏々歌の全文を揭ぐ。

烏々歌　宋　樂雷發

莫レ讀レ書、莫レ讀レ書、惠施五車今如何、請君爲レ我焚卻離騷賦、我亦爲レ君劈碎大極圖、朅來相就飲二斗酒一、聽我仰レ天歌烏烏、深衣大帶講二唐虞一、不レ如長纓繫二單于一、吮レ毫搦レ管賦二子虛一、不レ如快鞭躍二的盧一、君不レ見前年賊兵破二巴渝一、今年賊兵屠二成都一、風塵澒洞兮、豺虎塞レ途、殺レ人如レ麻兮、流血成レ湖、眉山書院嘶二哨馬一、浣花草堂巢二妖狐一、何人苦二中行一、何人縛二可汗一、何人丸泥封二函谷一、何人三箭定二天山一、大冠如レ箕兮、高劍挂レ頤、朝譚二回軻一兮、夕講二濂伊一、綬若若兮、印纍々、九州博大兮、君今何之、有レ金須二碎作一僕姑一、有レ鐵須二鑄作一蒺藜一、我當贈レ君以二湛盧青萍之劍一、君當報レ我以二太乙白鵠之旗一、好殺二賊奴一取二金印一、何用二區々章句一爲、死諸葛兮、能走二仲達一、非二孔子一兮、孰卻二萊夷一、噫歌二烏々一兮、使二我心不レ怡一、莫レ讀レ書、爲二書痴一、

身は學窓に在りながら却て書を讀む勿れと歌ふ。學問は實行の爲なり。我の此世に在りて學問するは戰地に居て地圖を讀むが如し、學ぶは直ちに行はんが爲めなり。行はざれば學ばざるに如かず。坐して言ひ、起て行ふ。學校は活きたる世界を奮鬪する大戰爭の軍略を講ずる所なり。書物讀みになる爲めに書を讀むならば寧ろ讀まざるに如かず。斯樣に學問と實行の距離相近くして其間一髮だも容れざりし時代に其頭を鑄り成したる希典が學派の異同、學說の差異など云ふことにつき、比較、考量、批判の才を缺き、唯だ物に接し、世に處する典則として古人の

書を見、吉田、玉木の緣に依りて一生山鹿素行を尊敬し、學問の筋も水戸學の範圍を脫せざりしこと、是れしかしながら諺に云ふ三才兒の魂は百歲翁となるまで亡せざるものにて少年時代、青年時代に先輩及び周圍より蒙りたる暗示が遂に一個の乃木風の學問を鑄冶したるものなりと謂つべし。幕府の末、天下猶ほ泰平にして、政界未だ風雲の起ることなかりし世には學者は今の世の如く、考證、批判、比較、參照を事とし學問の爲に學問すると云ふ風あり、果ては些末の註釋までも異同を爭ひ、人皆博覽を事として勸說を恥ぢ、學問は學者一家の自慢の話柄たるに止まりしが希典の物心つく頃より天下漸く多事となり、尊王攘夷を說き大義名分を論じ、學問は机上の空論より天下を經綸すべき政綱と變じたれば、人皆學問の爲に學問するを屑とせず、氣節を練磨し、事業を培養する爲に書を讀むに至れり。希典は則ち此學風一變の時代に生れ、父の希次、親戚の玉木、集童館の熊野先生（熊野眞介の事なり）、明倫館の僚友などに砥礪せられたれば生涯の傾向、此に定まり學者風の學問を好まず、批評家風の批評に興味を感ぜざる人となりたり。されば國學者の書物にても希典は眞淵、宣長、篤胤など云ふ考證風の古學者には餘り感服せず、却て渡邊重石丸の固本策二卷を得て大に其學風を感じわざ〳〵訪問して弟子の禮を執りたり。

渡邊重石丸は豐前中津の人なり、其祖父重名は本居宣長の高弟にて其頃いさゝか世に稱せられたり。父は重蔭と云ひて、中津藩に聞えたる人物なりき。此人皇典を研究し、平田篤胤歿後の門人となり、篤胤の子鐵胤に從學し、明治維新の前後には、家塾道生館を擴張し專ら育英の業に力を用ゐ從遊の士頗る多く、其徒皆慷慨激烈、氣節を以て人に驕るの風ありて、一藩の士氣爲めに大に奮ひたり。明治の初年京都大學教官に徵せらる。當時平田派の勢力天下を風靡し、公卿諸侯以下鐵胤の門に入る者踵を繼いで至る。重石丸其友丸山作樂等と頻りに大義名分を唱道し、數ば漢學者と衝突したり。其頃重石丸「天御中主命考」と云ふを著はす、其頃の學者は時代の新說に泥み野々口隆正など云ふものゝ如きは、高御產靈命のスは酸素を意味するものなりなど云ふに至れ

り。重石丸之を憤り、「學海針路」を著はせしが、間もなく京都大學は廢せられ、都を東京に移され、新に教部省を設けらるゝに及びて重石丸も移りて東都に卜居し、教部省に出仕せしが、程なく職を辭して香取神宮の小宮司となり、其後再び東京に出たれども復仕へず、帷を下して育英の業に從ふ。時に島津久光、重石丸の著述を讀んで國學者の中に此見識あるは珍らしきことなりと賞讃す。重石丸其頃志す所ありて薩州に遊びしが、時利あらず、失望して歸る。

「櫻島花は無くして秋風ぞ吹く」の歎あり。是よりして屢ば久光の邸に出入す。久光意を政府に獲ずして故國に退隱せんとせし時重石丸諫めて、公今位に在り殆ど尸人の觀ありと雖も、公あるが爲めに他人猶ほ忌憚する所あり、政務の廢弛も亦太甚しきに至らず、公一たび其位を去らば、國家の不利これより大なるは莫けんと云ひたれども久光聽かずして故山に歸臥したり。此時征韓論勃興し、西鄕隆盛、桐野利秋、以下袂を聯ねて辭職す。重石丸の門人增田宗太郎屢ば九州の地に往來し桐野、篠原等と會見せしが明治十年同門七十餘人と、中津の官衙を襲ひ走つて薩軍に投じ、遂に悉く城山に陣歿す。重石丸是より意を政界に斷ち隱居して志を養ひ、道生館に講義するの外、復た當世を念とせざりき。重石丸世人の髮を斷ちて西洋風に倣ふを惡み、

日の本も髮なき國となりにけり
　　夷の風の渡り來しより

と歌ひ、又「丈夫休晒求官拙、横刀結髮未誤身」と歌ひ其後遂に結髮の風を改めず。重石丸と云ふ名は萬葉集の字に取れり、重石丸これに依りて一首を詠ず、

大海のたゆたふ浪に重石おろし
　　國の柱とならましものを

重石丸常に皇道を說き、諄々として倦まず、端坐終日に亙る。毎朝水浴の後拍手して神拜を爲し、一日も怠るとなし。儉素身を以て子弟を導く。久米邦武「神道は祭夫の古俗なり」と云ふ說を出せしとき、重石丸の門下生數名邦武を訪ひ論戰半日に及びたり。重石丸著述多き中にも「固本策」二卷は殊に其精粹と稱

すべきものなりと云ふ。

其人と爲り思ふべし。重石丸嘗て歌あり。曰く、

白金の太刀さけ佩きて亞米利加の
國の大路を練らん世もがな
久方の天より下ろす瓊矛もて
世を碎くべき神業もがな

問はずして其學風を知るべし。是れしかしながら希典の少年時代に與へられたる暗示が其思想の傾向を決して斯樣に切迫したる學問の一流を作りたるものなり。希典を以てトルストイ翁に比するは或は倫を失したることなるべけれども、其思想が學問と實行の間に餘裕なく其學ぶ所に絶對的に服從せんとしたることだけは東西實に相似たりと謂ふべし。人を論ぜんとせば其人の心になりて論ずべし。希典の心の視界より天下の事を見れば今の世は猶ほ戰國の如し、油斷して士風を頽廢さするに至らば日本帝國は其尊嚴を維持し得べからず、日本國の今日に至るま

で外國の侮を受けず國運日に盛んなるは實に萬世一系の帝室が神胤を以て億兆に君臨したまふことゝ、此の至尊至上の皇室を中心とする日本國は世界に於て最も尊貴なる國なりと云ふ國民的自覺に依りて人心を統一するに因れり。則ち內に於ては皇室中心主義、外に於ては日本中心主義を以て思想の歸趣とするが故に日本國は千秋萬歲、日に榮え、日に進むものなり、此意味を近き世に於て最も明白にしたるものは山鹿素行の中朝事實なりとて、それを經書の樣に尊びたり。扨又斯樣の戰國に日本國を泰山の安きに置かんと思はゞ獨り思想の統一を計るのみにては不足なり、必ず人々皆戰國の心になりて士道を研くべし、それには山鹿素行、吉田松陰の著述などは心術の練磨に大益ありとて

武教小學。武教本論。（山鹿の著述）

孫子評註。武教講錄。（吉田松陰）

などを原本の通り、私費にて刊行し友人に配りたり。他人より見れば今時、戰國の心得を以て士道を礪くなど云ふとは些か無病呻吟とやらん云ふものに似たれ

ども、希典の素養より考へ、其鋭敏なる神經に感じたる國歩の艱難より眼を開けば斯樣に思ふも尤の事なり。たとへば宗教家が人生の無常を說きて人は死ぬべきものなり、早く後生を思ふべしと云ふが如し。多感の宗教家は死の眼前に迫りたるが如く感じ若き時より悟道に苦勞す。其苦勞に對し神經遲鈍の俗人も成程人は死ぬべきものなりとは爭ひ難き事實なりと心得居らざるに非れ共まさかに昨日、今日とは思はずして油斷するが常なり。さりながらやはり死は必ず來るものなり。それと同樣にて希典などが今の世を戰國なりと心得、內に於ては皇室中心主義、外に於ては日本中心主義にて人心を統一し、士道を以て氣節を磨き、まさかの時の役に立てんと思ふは餘り切迫の樣にも思はるれども、是れは唯だ生存競爭の世界、弱肉强食の世界を强く感じたると弱く感じたるとの差のみ。我等は其意見が餘り短兵急なりとの故を以て其說に根據なしと云ふを得ざるなり。さりながら其れも此れも要するに希典の少年時代に一生の方向を定めたる時代思潮の暗示の結果なりと思へば、希典自身に於ては矯飾にも、僞善にも非ず、誠實の心を以て左樣に信仰し、左樣に致さねば國家の安危に關すると思詰め居りしことなり。斯樣の次第なれば希典は明治三十九年七月に野村靖（故人、子爵）、井上哲次郎など云ふ人の組織したる素行會にも加入し、毎年九月二十六日と云ふ素行殁日を以て牛込榎町の宗參寺に開かるゝ其會には必ず出席し。素行の著述と云へば漏れなく涉獵し、平戸の山鹿家並に津輕家、津輕藩士の山鹿氏などより素行の遺書を求めなどし、文字までも素行の筆の迹を摸したり。希典は又同じ理由にて吉田松陰を未見の師と仰ぎ、松陰神社の建設は勿論、祭典の事なども主となりて世話を燒き、毎秋の祭日には晴雨を論ぜず必ず參詣したり。是皆其學問の流儀の祖にして而も士道の模範なりと思ひければなり。

希典學習院院長となること

希典は明治三十九年一月二十六日軍事參議官に補せられ、其七月には第五、第六、第十二各師管特別檢閲使仰付りしが其八月二十五日に特命ありて宮內省

御用掛を勤むることゝはなりたり。是は三皇孫殿下（迪宮、淳宮、光宮御三方の御事なり）御教育につき御諚を蒙り御教育掛と共に奉仕せよとの事なりしと聞えたり。明くれば明治四十年一月三十一日、學習院院長を命ぜらる。先帝は希典の事を善く知ろしめされたれば希典、今は悉く愛子を失ひたれば、その代りに澤山の子を與ふべし、今より學習院の生徒を汝の子と思ひて育てよとてかしこくも

いさをある人を教の父として
おほしたてなん大和なでしこ

と云ふ御製をさへ給はりしと云ふ。九重雲深し、固より野人の窺ひ知り得べきに非れども、傳へ承る所に依れば、先帝は希典こそ華胄貴族の子弟を教育するに最も適任の人なりと深く御信任あらせられしもの、如く、或年參謀總長缺員の時、希典を其職に補せらるべきやなど奏上したるものもありしに、希典には教育の事を任かせ置きたれば今さら之を易ふべきに非ずとて御聞入れなかりしかば其事を奏上したるものも畏こき叡慮に感激して希典轉任の沙汰は止みたりとぞ。興國の氣運に乘じ、動もすれば驕奢、淫蕩に流れんとする今の世に希典の如き雄心烈志の老將を擧げて質實儉素の士風を興さんとしたまひし先帝は實に非凡の英主にてまし〳〵けりとて、之を聞くもの、皆舌を卷きたりける。

學習院長としての乃木希典（一）

學習院長としての希典は此院に院長あつてより以來の異彩にして、恰も集童館、松下村塾、明倫館の昔を現代文明の粹を集めて造り上げたる新式の學校内に再現せんとするが如き奇觀を呈したり。たとへば此學校の四谷見付外に在りし頃は希典、毎日馬に跨り、自宅より通勤したりしが今の目白に移りし後は日曜と土曜に歸宅する外は、官用ありて外出せざる限は必ず學校に寄宿してその構外に出でたることなし。學校の敷地内には校長官舍とて特に立派に作りたる屋敷あり。學校の役人より大將閣下もその官舍に御住ひありたしと幾度も勸めたれど

も頭を振て聽かず、生徒同樣の寄宿舍に起臥し、生徒同樣の寢床に寢、食事も生徒と同樣にし、幼年級、中年級の食堂にてかはる〴〵生徒と共に膳に向ひたり。希典、此寄宿舍に居りて毎朝、生徒よりは一時程早く起き出で、長き鎌を携へて學校の構内を一巡し、草を薙ぎなどす。夜分は必ず學生と同時に寢ぬ。寄宿生の自習時間は午後六時より十時までにて十時には消燈「ラッパ」を鳴らす。それ迄は希典必ず院長室に居て書見をなし、毫も惰容なし。其有樣、院は恰も一個の大なる家庭にして院長は其父の如し。是れ既に教師は國家の官吏にて一定の勤めだに規則通りに行へばそれにて宜しと云ふ今の學校教育と全く趣向を殊にするものなり。昔の村塾にては師弟の間、近く、親しく、師は親ほどに恐ろしくも、なつかしくもありしものなりしが、今の世は田舍の中學校教員さへ其受持の生徒の身の上を知るもの少し。然るに希典は自身學校に寄宿し、生徒と同樣の部屋に寢ね、生徒と同樣の食膳を取り、生徒の中に在りて生徒の友たらんとす。是は全く時代の傾向に逆行したる行方なり。教師と生徒の間の隔り過たる現代の教育を、教師と生徒と同じ空意を呼吸し、同じ感情を懷き、一體の如くなりし村塾時代に返さんとするものなり。

學習院長としての乃木希典（二）

希典は山鹿素行の武教小學、武教本論、吉田松陰の武教講錄を學習院の修身教科書としたり。是は前文に記したる希典一流の學問の傾向より自然に來るべき結果なり。希典は四民の模範、帝室の藩屏たるべき貴族紳士の子弟は山鹿、吉田の流儀に從ひ士道を以て教育すべし。左樣にするが日本國の爲なりと深く信じたれば世間の批判などには頓着せず、一流を立て通したり。希典の眼より見れば今の日本人は餘り儒弱に流れたり。たとへば軍人の兵糧なども明治十年頃までは握飯と梅干を俵に詰めて戰場に運びたり。日清役にはその握飯が暖くなりたり。日露戰爭の時は兵糧は更に甘さものとなり、鰤、鮭、牛などの罐詰も出來、國家の干城たる兵士も戰場にて食好みをする樣になり。平時も若き身を以て老人

の引き居る人力車に乘りて揚々として自ら恥ぢざる樣になりたり。常人すら斯の如し、貴族紳士の奢侈に流れたること云ふまでも無し。斯樣の世態なれば此學校を以て奢侈淫逸の大賊を喰留むべき千劍破、赤坂ともし、此に士道を復活すべき同天の事業を起すべしと云ふが希典の理想なりしが如し。されば希典も敎育家として自身の行方が風變りの一流たりしは勿論自覺し居りたることなるべけれども憂世慨國の情已み難きものありて此に至りしことならん。希典の主義は此樣のものなりしかば、生徒がたとへば貴族の身なりとも馬車、人力車、自動車などにて登校するを嫌ひ、左樣なる懦弱の風を矯正せんとて自身は電車にて學校に通ひ、校内にては武藝を盛んにし、自身竹刀を取り、學生と擊劍をなし、或は柔術を試み、それが爲め老體の事故、身體大に疲れ痛むことありとも、少しも其氣色を現はさず。夏は生徒一同を連れて相模國片瀨の水泳場にて水練の稽古をさせ、其節も幼年生は寄宿舍に寢かしたれども中年生は海邊の砂原に張りたる「テント」の中にて疊も敷かざる所に起臥せしめ自身も同じ「テント」の中に住み、水泳の

時も眞先に海中に跳入り、只管に其筋骨を强くし、其志操を鍛練せんと試みたり。加之陸軍大演習の催さるゝ時などは必ず見學の爲め生徒を連れ行き、宿屋などに泊るは贅澤なりとて、多く露營せしめたり。或人之を評して學校と云ふは社會と云ふ大きなる鍋の中に入れ子にしたる小さき鍋の樣なるものなり。大きなる鍋の中の水が冷めたければ、小さき鍋に如何程の熱湯を入れたりとて必ず冷却すべし。希典が學習院に立籠りて華族紳士の子弟に山鹿、吉田の士道を吹き込むとも、其子弟の住む社會、その子弟の育つ家庭が日に日に驕奢、柔弱に流れ行かば希典の盡力も其大勢を廻らしかたからん歟。此點に於て希典の位置は楠公に似たり、賊の猛勢に惱まされて湊川の戰死を遂げざれば幸なりと云ひたりとぞ。

學習院長としての乃木希典（三）

さりながら一點の星火も大なる林を燒くことあり。敎育家として希典の態度は

時勢に逆行して進みしものなれば卽効の見ゆることは或はあるまじけれども、臘の如く柔かなる學生の心に希典が一たび與へたる印象は決して消滅せず。他日目白の學窓より頽風汚俗に向て勇ましく抗戰すべき若殿原の出で來ることもあるべしと云ふ希望は決して空想に非ず。希典が偉大なる品性は必ず其學校に學びたる人の潛意識となり、顯意識となりて長く亡びざるべし。希典は修身の時間には必ず生徒と一所に受持教師の講話を謹聽し、時としては自身も話しすることあり。左樣の時は必ず懇々として忠孝一致の義理を說くを常とし生徒は眞卒、謹嚴なる希典の威に打たれて鳴りを靜めて其說く所を聽きたりき。課業の間は斯樣に嚴重なれども、放課、遊戲の時、或は休日などは希典は全校の慈母の如く、生徒が白屬を持出して院長、何か書きたまはれと云へば「どれ一つやつて見ようか」と云ひて詩、歌などを書き與ふることもあり。或は生徒の肩をたゝき「乃公と一所に御出で、露西亞のステッセル將軍の馬を見せるから」と云ひて赤坂の自邸に連行きなどしたることもあり。生徒一同遠足を催す時なども希典自身早起きして、睡

り居る生徒の枕頭に辨當をくばり置き其覺めて後驚くを見て興じたることもあり。演習見學の爲め生徒の農家に雜魚寢し居る時などは、夜半わざ〳〵徒步してその宿所を見廻り、風を引くなと親切に注意したることもあり。希典と生徒との間は、薄紙ほどの隔てなく、自己の大なる品性を以て直ちに生徒の肝膈に觸れたり。火は火を生じ、熱は熱を起すと云はずや。他年此學校より希典に似たる人物の出で來りて其遺志を繼ぐものあるべきこと疑ふべからず。是も亦楠公が忠孝の血脈を子孫に傳へて長く皇家を護りたるに同じかるべしと云ひし人もありけり。

希典、伯爵となること

希典は學習院長となりし後、其年八月從二位に叙し、其翌月に到り勳功に依りて伯爵に進みたり。

（二一）希典自殺の事

實に人生は
止まらず
功成り名遂げし
なりにけり。
孫を抱きて
友として
齢なれども
今は唯だ
身を少年の
老書生、
老を忘れて

旅に似て
日月梭の
希典は
世の常なれば
家に老い
靜かに餘生を
子は死にて
君の御蔭を
友にして
目白の臺の
書を讀み

駒の歩みの
如くして
六十翁と
彼も亦
花鳥風月を
送るべき
妻は老いたり、
たのみにて
昔に返る
寄宿舍に
此に死なんと

定めつる
かくて其後
蒙りて
つはものどもの
旅をしつ。
依仁親王の
戴冠の
列りたれど
教子の
とよさかのぼる
日本の
擔ふ義務の
幸あれと

心すゞしく
一たびは
滿洲の野に
夢の跡
又一たびは
御供して
その盛んなる
朝夕に
其身の上ぞ、
天津日を
國の未來を
いと重き
思はぬ日こそ

見えにけり。
君の仰を
妻ととも
思出多き
東郷と
英國の君の
大禮に
思ひ出るは
東に
見るにつけても
その肩に
若殿原に
なかりけれ。

使命を終り
夢と暮れ
我大君は
たまひけり。
早く癒えませ
ましませと
さはさりながら
定命は
のがれたまはず
國民の
ついに崩り
あらぬ身も
我身に取れば

學校に
今年の夏と
あなかしこ
希典大に
さきくませ
祈らぬ神も
人の身に
一天萬乘の
かしこくも
仕へまつりし
ましましき。
君の御蔭に
大君の

還りし去年も
なりけるに
にはかに病ませ
驚きて
御代萬歳に
なかりけり。
免れ難き
君ながら
現人神と
大君は
ながらうべくも
ながらへし
御いきは臣の

命なり。
長き年月
思ひつゝ
翁となりし
棄て兼ねて
厚き恩に
今ははや、
君の御旗を
をめ〳〵と
心の恥も、
青年を
愛子二人が
戰死せし

三十年餘り
いつ死なん
死所を求めし
今日までも
死なでありしは
背かじと
心にかゝる
朝敵に
ながらへたりし
旅順にて
多く死なせし
健氣にも
その悲みも

五年の
何處に死なんと
希典が
露の命を
大君の
思ふ計りぞ。
雲もなし、
奪ひ取られて
武士の
前途有爲の
悲みも
御國の爲に
身に恥ぢて

涙一滴
振舞も、
懺悔に罪も
爲さゞるは
恥づべきことゝ
うつし世の
死ぬべき時に
いざさらば
御迹はるかに
覺悟しつ
三日と云ふに
弔砲の
妻諸共に

落さゞる
我死にたりと
ゆるされん。
勇士に非ず、
思はずに
露の命に
死なざれば
かんさりませし
をろがみて
今年の九月
大君を
譽きと共に
自滅して

鬼に均しき
人聞かば
夫れ義理を見て
恥づべきを、
無常迅速の
執着し
丈夫に非ず、
大君の
我も死なんと
十あまり
葬りまつる
いさぎよく
朽ちず亡びぬ

武士の
民の心に
師と父の
其紅の
丈夫と
夫と共に
つぶやかず、
湯地の娘は
隼人の
女の中の
無かりける。
長き思を
ものしたる

其精神を
止めたる
古き教の
血を以て
云ふべかりけり。
薄命を
從容として
流石にも
武士の家庭に
女ぞと
深き心を
短くも
しらべはたとへ、

日本の
希典は實に
眞理をば
あかしをしたる
さては又
悲みもせず
身を棄てし
たけく雄々しき
育ちたる
言はぬものこそ
淺く斟み、
つたなき歌に
いやしくも

義人節婦が　　忠孝の　　二四四
片影を　　世に傳ふべき　　きよき操の
なれかしと思ふ　　眞心は　　便りとも
ありぬべき。　　此に止むる　　許す人もぞ
書きつくされぬ　　我思ひ、　　筆の迹、
涙なりけり。　　せき來るものは

希典夫妻滿洲に赴くこと

希典は四十一年五月二十七日御用にて滿洲に赴きたり、露國將校除幕式の爲なりと聞えける。此旅は夫妻同伴し、六月四日門司を出帆し、それより大連に行き旅順に着き白玉山に上り戰死將卒の納骨堂に詣でたり。內室は歸京の後、或人に此時の樣子を物語り自分の子供も戰死したれども御上にてあれ程にして下さりしを見て有難きとと思ひぬ。御身等の子も彼だけにして頂きたる上は愚痴らしきとは言はぬ樣にせられたしと云ひしとぞ。

希典、東郷と共に東伏見宮殿下に隨行して英國に赴きしこと。

かくて希典夫妻は思出多き旅順の旅より歸りしが、それより三年を過ぎ昨年二月十四日東伏見宮依仁親王殿下に隨行し東郷伯と共に大不列顛皇帝陛下の戴冠式に列すべき仰を蒙り、四月十二日出發し滯なく御用を濟ませたりしが、希典、東郷共に武名の世界に轟きたる人なれば、歐洲諸國にて盛んに歡迎せられたり。行く時は郵船會社の汽船賀茂丸に乘り蘇士西運河を通りて英國に達し歸途は西伯利亞鐵道に乘り八月二十七日敦賀に着したり。此旅行中希典は常に東郷を先輩として兄事したりけり。

朝な夕なをろがみまつる東の
空にたふとき天津日の神

東にとよさかのぼる天津日の
かがみちわたる大海の原

と云へる二首は希典、此度の航海中の作なりとぞ。希典は歸朝の後、或人に旅中の觀察を述べ、

獨逸にても伯林の樣なる都市のみ膨脹し田舍の質朴なる氣風は追々亡ぶる樣子なり。日本も都會の膨脹に連れて田舍の堅實なる氣風の亡びんとするは國の將來の爲恐るべきことなり。

○

軍隊の生活は質朴に暮し慣れたるものならでは堪へ難きものなり。されば都會の膨脹は強き軍隊を造ると云ふ點より云ふも憂ふべき事態なり。

○

獨逸の老將軍は盛んに障害物運動をなす。日本の將校も老人になりて直ぐ衰へる樣にては埒もなし。自分は今後益す努力奮勵する積りなり。

など語りしことあり、日本學會にては

○

出發の時は横濱より郵船會社の汽船に乘る、料理の献立は勿論、船内の案内書は凡て横文字であつた。私は横文字に疎いから言ふのではないけれど、日本の船籍を有し日本の國旗を揭げて居る汽船の中で日本語を用ゐないのは甚だ不都合なことだと思つた。

○

日本の停車場などには何時から誰が決めたことだか知らないが國語と英語を兩用してある、然るに西比利亞鐵道は世界の大道であるに係はらず、露西亞語より用ゐて居ない。便不便は兎に角、私は露西亞のやり方は痛快だと思つた。

と云ふ趣意の演說を試み、學習院にても視察談の序に

ルーマニヤ王竝に王妃殿下は希典を招き、如何にも平民的なる御態度を以て王子、王女をして親しく茶菓を給仕せしめられし。

と語り、其座におはしませし三皇子殿下の方に向ひまゐらせ
臣は我皇室が、今遽にルーマニヤ宮廷の如くおはさんを希望するものにあらざれど將來には斯くあらせ給はんことを切望し奉る。
と述べたりとぞ。

明治天皇崩御希典殉死の事

明治四十五年七月三十日、明治天皇崩じたまふ、希典の愁傷誠に筆に盡すべからず。九月十三日遂に夫妻兩人殉死に及びたり、其事猶ほ世の人の記憶に新たなれば此に縷述するに及ばず。唯だ大略を述ぶべし、明治天皇崩御の後は希典は頭髪を理めず髭髯に剃刀も入れず病人の如くにして顏色もいたく憔悴し痛切なる哀情は何人の眼にも著しかりしが、殯宮へは毎日三度づゝ參拜し、鮫島大將と交代し一晩も缺かさず通夜したり。斯くて九月六日、學習院の生徒に御大喪につきて心得べき事共を示し

はかなきは人世の常とて自分とても何時亡き者の數に入るべきか測り知るべくもあらず、春秋の富める諸子は能く勤勉して名を擧げ家を興し天晴れ皇室の藩屏たる覺悟あれかし。
と演說したりしが、其聲は常より低かりき。同九日第一皇子裕仁親王殿下の步兵少尉に任ぜられたまひしを賀し奉つらんとて午前十時東宮御所に參候し、先づ御任官の祝詞を言上し、さて今回コンノート殿下の御接伴を仰付られたれば當分の內御殿にも參上叶ひ難かるべし。就ては此際殿下の御將來に付愚存の在る所を申上げたしとて、これより將來の御心得となるべき事共を申上げ、中朝事實を献上し、
お歳を召すに從つて、此書の面白味が增してまゐりまする、私は一番好い書物と存じて献上致す次第でございます、要所には私自ら朱點を施して置きました。
と申上げ、且學習院にては今後は特に皇太子殿下として御扱いたし御課目も增加

し候と述べ、御弟の二皇子には御成長の上兄宮のよき御補佐と御なり遊ばすべしとて其旨細々と申上げて退出したり。此時皇儲の君の御側には波多野大夫、村木武官長、桑野主事等侍りき。同十一日希典は午前十時を以て陸軍省を訪ひ、田中軍務局長に會見す。時に軍務局に三人の客あり。希典は客の去るを待ち午前十一時頃より田中に對し意見を述ぶる所ありたり。田中は「微力ながら實行せん」と答ふ。希典之を聞きて情迫り、語激し、直立して堅く田中の手を握り、「田中、是非賴む〳〵」とくりかへす。別るゝ際にも一回出口にても一回、出てよりも一回、四回の握手をなし其都度毎に「賴む〳〵」と云ひて別れたり。此日希典、コンノート殿下を横濱に迎ふ。兼ねて接伴委員を命ぜられたればなり。同十二日殿下と同乘して參内す。此夜希典家に在りて遺書を認め、其後殯宮最後の御通夜として黑衣の洋裝したる内室と打連れて出仕し御通夜申上げたり。希典の内室が宮城に入りしは是迄なき事なれば人々目さましく思ひぬ。同十三日午前九時宮内省より廻されし自動車に乘りて夫妻參内し宮中桐の間の靈化奉安の御儀式に參列し、

其夜午後八時、御大葬の弔砲の鳴ると同時に夫婦ともに家に在りて一室に端坐し、明治天皇に殉死し畢んぬ。希典の自刄したるは其家の二階の奥まりたる八疊室（疊敷西洋室）にして、宮城に面したる方に机を置き大行天皇の御眞影を其上に奉安し眞榊を供へ辭世の歌及び遺書を置き正裝端坐し軍刀（中身は日本刀）を以て割腹し更に頸部を右より左に貫きて前方に伏し居たり。内室は第一期の喪服を着し希典に並て端坐し白鞘の短刀にて左胸心臟部を刺して前方に伏し居り毫も取亂たる狀なかりき。辭世は

うつし世をかむさりまし、大君の
　みあとしたひて我はゆくなり。
神あかりあかりましぬる大君の
　みあとはるかにおろがみまつる

いでまして歸ります日のなしとさく
今日の御幸に逢ふぞかなしき

と云ふ三首と聞へける。

補遺

乃木家の氏神の事

希典の遺書中にある沙々貴神社は滋賀縣蒲生郡安土村字常樂寺にある。安土は信長時代からの有名な史蹟であることは人の知る所である。此所に鎮座せる沙々貴神社は宇多天皇第七の皇子敦實親王を祭つたのであるが、親王は卽ち近江源氏の祖先であつて、希典は實にその後裔である。斯ういふ由緣によつて日頃から希典は同神社を尊信してゐたが、日露の戰役凱旋後、明治三十九年六月二十九日希典は內室と共に同社へ參詣した。時の蒲生郡長遠藤宗義、安土村長矢野平四郎其他

の有志は希典を歡迎した。希典は東海道線八幡驛から人力車で同神社に着いた。陸軍大將の正裝で恭しく神前に拜跪し、暫らく默禱したる後、一同と撮影し、雄松一本を記念の爲に境內に植ゑ、神社保存費として五百圓、旅順戰利品の劍一口、銃一挺、奉天戰利品の鎌一本を獻納し、歸途安土小學校の講堂で兒童の爲めに一場の訓話をした。四十二年八月廿二日にも希典は再び內室同伴にて參詣し石燈籠一對を獻納した。

祖先の墓の事

佐々木四郎高綱は老後剃髮して了智上人と稱して信州松本に程近き東筑摩郡島立村字南栗林區に一寺を創し寺號を正行寺と呼びたるが後今の松本市裏町にも同じく正行寺を創し、此寺にて終りしと云ふ傳說あり。高綱の墓と云ふは今も島立村の正行寺より西方三丁の一宇の藥師堂の後にあり自然石にて表に了智上人墓、裏に俗名佐々木四郎高綱承元三丁未十月廿五日と記す。明治三十九年五月十

四日の事なりしが鹽尻峠の嶮を踰え武田耕雲齋の跡を尋ねて孤劍飄然鹽尻宿に着きたる希典は翌日松本迄の三等切符を買求めて途中村井驛に下車し松林の間を西北に縫ひて島立村の正行寺に至り件の堂後の墓前に詣でゝ低徊久しうして去る能はず、遂に手づから四株の扁柏樹を墓畔に植ゑ夫より藥師堂に少憩の後更らに正行寺に引返して住職と語り若干の香資をも寄進せる後松本に入り裏町の正行寺を拜して此寺の庭にも一本の杉樹を植ゑたり。越えて四十一年八月七日も亦松本に來りしが此時は内室と一名の書生をも伴ひ島立の正行寺に行きて高綱の墓に詣で今度は墓前に四基の石燈籠を寄進したり。其の石燈籠は孰れも自筆に成れる『了智上人御墓前乃木希典建献明治丙午夏日』なる文字を刻せるものなりき。其時にも希典は寺僧に會ひて仔細に祖先の物語などし、寺の事をも尋ね而る後に、若干の香資を寄せて松本に引返し、更に裏町の正行寺に至り此處には勝典、保典二人の戒名を自書せる位牌を託し二子の追善供養をも爲して歸りたり。

又一說

或る年の夏なりき、信州松本中學の生徒兩三名、朝まだき登校せんとて郊外の畦道を急ぎつゝありしに、會々其昔宇治川の先陣に天晴の武名を轟したる佐々木四郎高綱が菩提寺の邊りを過ぎたり。此時行手の方に此の地方には見馴れぬカーキ色の軍服着けたる老將校の獨り道を急ぎ行くあり。生徒は如何なる人にやとの好奇心より夫となく老將校の跡を見え隱に忍行きしに、斯くとも知らぬ老將校は重き足取を運びて、寺内に入るや直に佐々木の墓前に立ちぬ。素より生徒の心には年老いたる後備將校などの、此の附近の名勝を探り居るとのみ思ふの外深き仔細を知る筈なく、珍らしげに其の擧動を打守り居れば彼の老將校は墓前に立ちて暫く碑面を打眺め居りしが、やがて懷中を探りて取り出したるは見るも眩きまで燦爛たる金鵄勳章なり、老將校は之を墓前に捧げて何事をか暫く默禱し居りしが、又再び之を懷中して立去らんとす、斯くて歸途適ま響の中學生兩三名と邂逅せしに、

老將校は突如聲を掛けて校名を問ひ、時計を出して最早開校時間に程もあらず、急げと計り言捨て行過ぎしが、彼の中學生は其嚴然たる威容何となく見覺えあるを頻に打案じたる末、思ひ當りたるは乃木將軍なりとて、生徒の足一度松本市に入るや忽ち全市の評判とはなりにけり。

乃木十郎の事

乃木希次は藩の幼主總五郎の傅役となりしが藩學敬業館にて劍術を稽古の時、他の學生に對し『若殿樣だからとて少しも憚るところはない、遠慮なく擲りつけるがよい』と勵ましたることあり。其人と爲りを想ふべし。

義士の墓に參詣の事

希典の江戸に生れて麻布の藩邸に育つた時分は父の十郎は時々希典を連れて泉岳寺なる義士の墓に參拜した。希典も時々單獨で參拜した事もあると云ふ。十郎が義士の墓へ連れて行つたのは赤穗の義士が十名程毛利家にお預けとなつて居た因緣にも由ることであらうが其一大理由は希典を敎育する爲であつたらしい。十郎は單に數ば參拜したのみでなく度々壯烈な義士の最期を希典に嘶して聞かせたさうだ。

長府に於ける乃木家の生活の事

○

父が國詰を命ぜられ東海道の道中をした時希典は父母と共に歩いて歸國した。

○

さて遠路の旅の疲れを慰める暇もなく町府の屋敷へ到着した乃木の一族は神功皇后を祀つた神社の裏手にある小さな家に旅裝を解いた。その家は本屋がなく長屋ばかりで六疊三疊二疊の三間限りない狹い住居であつたが十郎夫妻は子供と共にこの家に住んだ。久し振に歸つたと聞つけた舊知の人人は續々と訪問して來たが

招ずべき座敷もなく上り框に座蒲團をすゝめて歡談する樣な始末、併しその狹い家にも周圍の壁の上に棚を吊つて武人の家に揃へて置くべき一切の武具をずらりと並べて置いた。

○

希典の家は甚だ豐かでなかつた爲め、衣服は殆んど皆父の着古したもの許り、夫れを父が古實家であつたから、戰國式の筒袖に仕立て着せた、卽ち袖口へ打ち紐をつけて結ぶのである、袴は小袴と稱して矢張り裾口を打ち紐で結ぶ。乃木一家の人は悉くこの扮裝で、極く質素ながら凜々しい武士的の服だつたから當時の子供仲間からは冷笑されたけれども希典は無頓着であつた、夫れから父は公用のため朝一度に大食して置き、晝も晩食もヌキとして働くと云ふ流儀の人であつたので、希典初め兄弟皆其眞似をした。鄕黨では乃木の喰置きと云つて有名な語り草となつて居た。乃木一家の辨當は何な處へ行く時でも麥飯の握飯で、中に梅干を入れ外は醬油をつけて燒てある、是れ又有名なもので、乃木式辨當とさへ

云へば、右の樣な握飯の事となつて居た。衣服と云ひ食事と云ひ共にこんな風だから、當時長府の父兄は口癖の樣に乃木さんの眞似をせよ、乃木さんの眞似をせよとて皆子供を誡めた。

○

長府の乃木の家の暮しは決して豐かなものでは無かつた、家族も多いしするから十郎夫妻もダイガラと云ふ米搗臺をとん〳〵と自身にも踏み子息にも踏ませた。希典は其頃無人と云ひ弟（後の玉木正誼）は眞人と云つたが此兄弟も幼年ながらダイガラを踏んだ。子供の事で重量が足ずに兄弟一緒にとん〳〵と踏み乍ら書籍を讀んだ。

○

希典の父ばかりでない、母も非常にエライ人であつたから、敎育の仕方が總べて一般の模範になるべき遣方である。卽ち希典が子供の時分、食物の中に厭ひな物があつて喰ない場合には、一家の人々が皆其お附き合をして、其厭ひな物が喰ら

れる迄一週間でも、二週間でも、三度の食事の折り他の副食物は一切喰べず、夫れ許り喰つて凌ぎ所謂不言實行で矯正した。

○

希典は幼年の頃長府で漢學を教授して居た結城塾に這入り毎日書籍の包を抱へて城下つゞきを通うて居たが折柄の嚴冬に肩をすぼめて寒い〳〵と言暮すので十郎は『それ程寒ければ暖くしてやるから一緒に來い』と屋外に希典を連出した。什麼するのかと思つて居ると父は愛兒を井戸端に立たせ釣瓶の水を汲上げて頭の上からざぶり〳〵と三杯まで浴せかけ『さあ此で暖かくなつたらう』と捨置いたので其後希典は決して寒い暑いと云ふ事を口にしたことはなかつた。

○

希典の幼時は身體も虚弱で活潑な遊戯などは出來ない程であつた。何時もシクシクして許り居た。玉木家を繼いだ弟の方は骨格が逞しかつた。

○

希典幼年の砌は頗る弱かつたので十郎夫妻も『到底無人はものになるまい』と歎聲を洩して居た。

○

少年時代の希典は快活な少年で竹を割つた様な氣質であつた。

集童館の事

○

長府藩主の思召で當時長府隨一の武士熊野眞介を總督とし、福田扇馬を學事教官として集童館といふ學堂を新設された、寄宿も通學もあつたが、希典は玄米を擔いで入舍し、自分で米を舂き薪を拾ひ自炊生活で勉强をした。科目は學問、擊劍、鐵砲、馬術、相撲などで、希典は丁度十四五歳の時、學問の方は善かつたが、何分にも身體が虚弱であつた爲め武術の方は思はしくなかつた、特に相撲と來てはゼロだつた。希典は此處に隨分長く居たが一度も人と喧嘩をした事がなかつた。

尤も議論は間々遣つたが論旨頗る明確であつた。休暇は一六の日で此日は熊野、福田兩裁判長の下に對策と云ふ事をやる、畢竟學才と膽力との試驗で「親が惡企をして主家に仇をする場合、子として其親に對する處置如何」と云ふ樣な問題を出し、先意見を書かせ、當番が函を以て集に行き、其意見の如何に依て敵味方の二組に分ち、此度は口頭で議論をするのである。辯舌の如何は元より問はず只論旨の正當なるを可とした、夫から其夜子の刻過になると膽力の試驗で、新墓へ行くとか刑場へ晒首を見に行くとか或は油揚を以て山中に入り狐の穴へ木石を投込み、油揚を取られずに持つて歸る。未明になつて果して行つたか何うだかを檢分に行く者があつて定まる。希典は毎回兩方共佳く及第して居た。學生は百八九十名も居たが、學才の方が佳ければ膽力が缺け二つながら出來て、合格する者は誠に少なかつた。此の對策の日には「楠公遺命狀」を朗讀する定めで、是れを朗讀する者は、平生行狀が善くて學問も出來る者でないと其の任に當るを許されないが、希典は能く此の名譽を荷うた者だ、だから同學者間から常に尊敬されて居た。

或時希典の父が集童館へ來て無人は家に在る時粗食に甘んじ寒いとも云はぬ樣になつたが館内にての成績は如何であるかと聞いた、すると熊野は將來私が必ず立派な人物にして見せると誓つた、此熊野は明治元年越後で討死をした。

玉木の塾にて學問する事

玉木は代々の儒者で文之進も詩文に巧で筆蹟は殊に麗しかつた。其の私塾を松下村塾と稱して居たが、それが後松陰によりて其の名を現はした松下村塾の前身であつた。門弟は松陰を筆頭に故前原一誠、故子爵宍戸環など有用の人材を社會に送り出した、文之進は後藩の學校明倫館の教頭に擧げられ次で數郡の代官に歷任したが、當時の代官中に其比を見出さぬほどの名代官であつた。藩の重臣も翁の

練鐵の如き硬直と、白雪の如き廉潔とに憚り、蔭口にも決して呼捨てにせず、玉木先生と唱へて尊敬した。萩家中の小兒が惡戯をしたり惡泣きをしたりする時、「ソラ、玉木先生が叱りにお出でた」と威かすとすぐに泣き止めた。

○

玉木文之進は籐心と云ふ渾名があつた。籐心とは凧の鳴弦のことで八釜し屋の玉木に生徒が奉つた尊號であつた。

○

希典或時玉木の塾に入つた時の事を人に話して、斯んなことを云つた。入塾したら先づ豫定表を示された。これは朝起より夜寢に至るまで一切の課程が出來て居る先づ

第一、朝起きたらば仲間等を使はず自分のことは自分に處辨すること。

第二、洗面に際しては、眼を冷し齒を食鹽にて磨くこと。

第三、畑を耕すこと、腕不相應の鍬を使用し疲勞空腹に堪へざるに至つて歸り腹が減つたかと問ふ有の儘を答へず左程減らないとでも言はうものなら、減らない筈があるか減つたらば減つたとなせ言はぬ馬鹿ッ!!直に落雷である。

第四、腹が減つたら食事をせよと出されるのが冷飯副食物は何も無い、長府の自宅でさんざ仕付けられて居たが之には眞に閉口した。飯が咽喉へ引掛る。先生曰く飯は嚙んで喰ふものぢや、嚙んでさへ居れば水液が出て自然に通る、味噌汁といふが、戰場には味噌汁は無いぞと一喝される。

第五、腹が太くなつたら書物を讀めと五經を出して讀み方を教へ講義を爲さしめて片ッ端から非難する。それが十五六の少年の相手の教育だ。

第六、次には納屋の肥桶を取つて便所の大小便を貯藏甕へ運べと命ぜられる。大肥桶に少し入れては叱られると思ひ一杯入れたはよかつたが十五六の肩では地を離れない。先生の巨眼電一閃馬鹿ッと又も落雷だ。貴樣は國を潰す者だ、なぜ分相應力相應に少し入れないか斯く澤山入るれば汝の體を傷くるか桶を損じて結局得る所は無い。さういふ分不相應の事をする者は終に國を潰す者だと。

第七、擊劍
第八、操舟
第九、武器砲臺製造所見學手傳
第十、夜間讀書

是が第一日からの日課だ、其上に水田を開いて田を耕作をさせられる。田の畠よりはうんと豪い、米麥が如何して出來るかを知らざれば士とは爲れぬ、士として農家の發達を圖り難い、商の事は關係が無いが農工の事は心得が無くてはならぬとて何を爲しても非難無きはなく點數はどうしても落第點で有つた。

○

希典が明倫館へ通つた時分學校の歸路に冷飯草履の鼻緒を切らせ片足のまゝ玉木の家にかへると玉木は、「なぜ片方の草履を捨てゝ來たのぢや、畑の肥料にでもなるものを」と呟いた。玉木の儉素は此一話で分る。

希典一旦歸藩の事

明治二年希典は佛國式の訓練を伏見でやつて一寸歸藩したことがあつたが其時兵式を佛式にすべしと建白し藩の採用する所となつた。

前原驛動の前玉木正誼、希典を誘ふ事

玉木正誼は希典を味方に入れ樣と考へて、夫れとはなしに先づ玉木夫妻を初め實の父母に暇乞を爲し、飄然として小倉に希典を訪づれ、人知れず密かに胸中を打明けた。希典は其意外に驚いたがさあらぬ體で微笑を漏しながら『實は今少し用事があるから後刻改めて尙詳細に聞くことにしよう』とて、其室から弟を他へ退けて置いて、急に副官を呼んで最前の室の押入の中へ忍せおき、恁くて再び弟を招き入れ、其說く所を聞き取つた後。希典は諄々として其不心得を諭したが、正誼は更に心を飜へさず夜に至るまで痛論したけれども、兄の意志は强固で如何

ともする事が出來ず、夫れかと言つて自分が前原に誓つた一言を反古として兄の意見に從ふことも出來ない。其處で兄弟順逆に分れる事となつたが、希典は弟の手を握り涙を呑んで、『不幸にして兄弟心を一つにする事が出來ず、今日此處で訣別するは千秋の恨事であるが事茲に至れば止むを得ない、故に私は兄として汝に須らく戰死せよとの一言を餞別の代りに呈する』とて水盃を酌んで別れた。夫れから希典は弟が歸つて後で直ぐに其筋へ向つて、前原の反旗を飜へすに至れる事情を電報で詳しく報告した、之れが爲めに官軍では早く敵情を知つて策戰頗る宜敷を得、容易に平定する事が出來た。

又一說

一誠の亂の起る十日程前の或朝例になく希典が朝寢をしたので或人が其譯を聞くと昨夜遲く迄萩の玉木家へ養子に行つて居る弟が來たのでと輕く答へたのみであつた。其後希典は其人に當時の事を話して弟が毎々前原一派に與せよと說くので氣の毒だが弟たりとも謀叛すれば惡むべき朝敵だ、よし彼を欺いて吾が餌にしやうと決心し、何日の眞夜中に來いと彼を誘ひ一方では陸軍裁判官志和智、橋本の兩名を襖一重離れた室に忍ばせて弟の言葉を一々書取らす手順を運んでおいた。それと知らぬ弟は同志三名と共に來て俺を引込む爲め大秘密に附して置かねばならぬ軍略から越後と佐賀とにも同志があつて相呼應して兵を擧げる聯絡に至る迄打ち明けて了つた。之を直に參謀本部に注進に及んだ故、亂を未然に平げる事が出來たのだ。言はゞ弟は逆臣乍ら予の恩人だが罪は何處迄も惡い、併し死んで呉れたから先づ安心だと言つた。

日本刀と洋刀とにつき希典父子の異見の事

希典が聯隊長として小倉に赴任せんとする時なりき父の十郎は希典の洋刀を見て「武士が夫樣ものを差して役に立つか」と云ひしに希典屈せず、「是は素より指揮刀なり今は昔と違ひて一騎打など云ふ事あらざれば、之にて澤山なり、所詮昔の

采配と云ふ類のみ」と、天晴其場は遣り込めたるも、其後十年の役出征に際し、希典も切りに日本刀の必要を感じ、父に宛てゝ家傳の名刀一口を頒たれん事を乞ひしに、嚴君は烈火の如く憤り「先には偉さうな事を言ひて遣り込め、頗る得意の態度を示し乍ら、今更ら刀を吳れとは武士の言はれたことか」とて頑として應ぜず。是には流石の希典も返す言葉なく弱り果てゝ、親戚の人々などを賴み、父を宥めて、遂に一刀を貰ひ受けたりとぞ。

希典、久留米病院脫走の事

明治十年役の時希典は久留米病院に入りしが一夜看護人の隙を謀つて未だ癒ざる身を病褥より起し病院をば脫出し行衞知れず爲りたり。傍に寢ねたるもの希典の寢床の藻脫けの殼なるに驚き試みに褥を探り見れば一通の書置ありて脫出の理由を認めあるより卽時醫員に告げてそれより追蒐けたれども及ばざりき。

希典大佐昇進祝の事

希典が大佐に昇進した爲め、部下一同が昇進祝をしやうと云ふたが、希典は頑として聽かず、迚も應ずる氣色が無い、けれども友僚の勸告默止難く澁々之を行ふことになつたが、會場と云へば越中島の射的場、御馳走は何んにも無く、唯盛んに射擊をやるのみで恰も演習に行つたと同じだつた。其時後で大きな爆發の音がした。一同は爆發演習でもやるのかと思うて回顧ると、驚く勿れ麥酒瓶の爆發だ。希典は餘程ハイカラの積で麥酒を御馳走する筈だつたが、麥酒瓶が日光に當ると破裂することは知らなかつた。それで麥酒は悉く流て了ひ、一同夕方迄射擊をしたゞけで空腹を抱へ歸つた。

日清戰役の時、希典清人の捕虜を優遇したこと

糧食部の役人希典に隨ひて金州城に在りし時當時多數の捕虜將卒ありしかばそ

の役人は彼等に供するに大豆を以てせんとて部下に命じ捕虜將卒の食料として之を贈りたり。希典此の樣を觀て大に驚き態々其役人を麾きて痛く叱責して曰ひける樣、勝つも負くるも戰の習ひなり捕虜は戰敗れたるも猶且戰場に止まり飽迄奮鬪を繼續し遂に捕虜たるべき運命に會せしものなればこれを冷遇すべきものに非ず。今此の名譽ある將卒に對し大豆を供すとは以ての外の事なり、今より斷じて大豆を廢止して米穀を與へよとありければ、役人も大に慚愧し直に其の命令を取消し捕虜に優遇を與へたり。

蓋平の戰

蓋平の一戰に我が軍が大捷を博せしは實に希典の偉功なりき當時海城より援軍の來るべき約ありしも時遲れて來着せしを以て其の効なかりき。

○

此の時糧食部に一樽の清酒を保存せしかば大捷を祝賀せんため糧食部より此の清酒を希典の許に贈りしに、希典は部下の將卒を集め、今茲に一樽の清酒あり慰勞として茲に酌まんとす、然れども清酒に限りあれば宜しく將卒の區別なく一箇の支那茶碗を持來れと命じ、一碗の清酒を分配し殘餘の清酒は悉く海城より援軍に頒ちたり。

模範師團長の時代

希典が十一師團長たりし當時のことなり、希典は非常の綺麗好きにて、普通なれば兵營の細密檢査（清潔檢査のこと）を行ふ時は、數日前に其旨を豫告し置き凡ての準備をなさしむる習慣になり居たるに、希典は之を不可とし不時に檢査を行ふべき旨諭達せり。左れば各聯隊に於ても何時師團長の檢査があるかも知ぬからとて、常に兵營内を清潔にし秩序を亂さぬやうに心懸け居たり。その年の冬の或日の正午頃なりけり。騎兵第十一聯隊の西門に衞兵指令（軍曹）某、歩哨係（上等兵）某が六名の衞兵を預り歩哨勤務をなし居たるが、交代の時間になりたれば

命令を移すため衞兵指令は聯隊部に走り歩哨係は其の後にて衞兵の交代を行ひ居たり。折柄希典は突然南の方より出で來り疾風の如く門内に入れり。軍の規定として將官來着の時歩哨は堵列をなし喇叭手は直に「海行かば」の譜を吹奏するとなり居れり。左れど希典の來着が餘りに突然なりしと歩哨の交代時なりしため堵列も喇叭の吹奏もなし得ざりき。營舍内にては聯隊長以下が食堂に集り午餐中なりしが喇叭が鳴らぬため大將の檢閲とも知らず、大將が舍内を悉く巡閲し終りし頃漸く心附きしやうのとなりき。幸ひにして舍内の清潔は保たれ居り、何のともなかりしが「堵列」と「喇叭吹奏」の二つを怠りしため軍曹上等兵並に六名の衞兵も非常に恐縮し、軍律により禁錮の處分を受るものと其の場に覺悟し、尙聯隊長以下が共に責を負ふを氣の毒なりと考へ居たるが、希典は間もなく外に出で一町ばかりも行きし頃、此のことに氣附きしと見え引返して聯隊長に向ひ「歩哨の配置は肝要なり予のため堵列を怠りしといへども咎むべからず寧ろ其の職に忠なるを賞すべし」と言ひ聞かせ其の儘司令部に歸りしかば一同は罪を免れたり。

希典滿洲陣の事

旅順攻圍の陣中に在りたる時希典は特に全軍に令して「爾今陣中に於て自分と相逢ふも何人も敬禮するに及ばず」と傳へしめたり、其頃要塞戰に於ける前哨線は著しく敵に接近し居れば敵も味方も人影さへ見ゆれば直に狙撃し合へり、殊に將校らしき姿などの現るゝ時は、何れも必死となつて一齊射撃を浴せ掛けたり。されば前哨線の危險は實に恐る可きものなりしが、希典は些かも念頭に懸けざるものゝ如く、燃るが如き眞紅の將官帽に肋骨の上衣を着し、雪白の袴を穿ちて、悠々前哨線に現れたる事、幾度なるを知らず、人の「閣下お危う厶りますから」と止むる者あれば、希典は敵が狙撃せんと一齊に浴せ掛くる銃丸の唸りを微笑に迎へつゝ、片手を高く振つて「な、暫く許してくれ」と靜かに歩み去るを常としたり。

○

鳳凰山々麓に一の瀟洒なる天幕ありたり。此れ外國從軍記者等が、贅澤に飽かして建てたるもの、表に「日本兵士諸君に限りお茶を献ず」との貼札あり。勿論此の兵士と誌したる意味は將校兵士凡てを包含せしものなりしが、特に兵士とあるより將校等の出入する者は一人もなく、只だ下級兵士のみ通り掛りに立寄りては外國記者の厚意を感謝しつゝありき。然るに一日此の天幕を排して入り來れる一人の老將官あり。居合せたる外國記者等が何心なく仰ぎ見れば、何ぞ知ん乃木閣下なりければ、大に驚き、紅茶よカフェーよと頻りに立騒ぐを將軍靜かに聞き付け「イヤ私も兵隊の一人ぢや、澁茶によばれたい」とて聽かず。遂に一杯の澁茶をさも甘味さうに喫して立去りしが、是より希典は通り掛りの度毎に必ず立寄りて澁茶を飲みゆきしとぞ。

○

希典法庫門滯陣の折或る兵士に獨々逸を書き與へたることあり、其文句に曰く「手柄ばなしも既う聞きあいたすとしお茶でも召しあがれ」

○

陣中にて講和成立を聞いた時は青年將校連には不平の聲も聞えた。或る將校も其折の卽興に日頃好む俳句を一句吟じた所が、何時か希典の耳に入つて直ちに出頭するやう傳令が有つた。其人は何の用かと驚いて早速出頭すると俳句の事を問うたので「釣り上げた魚逃しけり青嵐」とやりましたと云つた。希典は劍の柄を按じ乍ら『ムヽ』と云つて微笑した。

○

希典は滯陣中時々近郊を散策することも有たが其際は成るべく部下將士の目に觸れぬやう密行するのが常であつた。

○

希典は一枚の郵便切手一葉の端書でも御紋章の印刷してある所へは決して手を觸れることが無かつた。

○

希典の常に居る司令室には直隣に副官室事務室があつて間々話の聲が希典の耳に入ることがある、其際若し『陛下』と云ふ聲の聞える時は希典必らず襟を正し容を改め端然として、『陛下』と發言した者を呼び徐に『陛下が如何遊ばした』と詳細に聞取り御變りあらせられずと聞いて初めて安堵するのが常であつた。毎朝起床後直ちに東方に向ひ遙拜をした。

日露戰役凱旋後長府に歸りしこと

日露戰役凱旋後希典が歸郷の時に、郷黨では大歡迎會を催ほさうとの相談が纏まつたので、友人から時日を問合した所師走下旬の積だと云つて來た。大晦日になつても來ないから郷里では一月中頃にでも來るだらうと噂さして、其年も終り元日町の者一同學校へ集まつて、壽留目か何んかで冷酒を酌み祝つて居た所へヒョックリ來たので一同は非常に面喰つた、すると希典は『師走忙しい時に歸つて歡迎會などして貰ふと、甚だ氣の毒だから本日此處へ參れば別に歡迎會の樣な費へなしで、お互ひにお喜びする事が出來ると考へたから……』と云つた。

凱旋の時、決死の趣奏上したりとの一說

希典は日露戰役凱旋の日闕下に參り御前に於て復命し、特に優渥なる御沙汰を拜したるに關はらず、鞠躬如として御前に拜伏し『臣希典不肖にして陛下の忠良なる將校士卒を旅順に於て多く失なひたり此の上は只割腹して罪を陛下に謝し奉つらんのみ』と聞え上げたるに陛下には只々御傾聽遊ばされたるのみにて何とも御仰せあらせられざりしが軈て將軍の拜辭して御前を退下せんとする後姿を御覽ぜさせられ將軍を御呼び止めたまひ御氣色を改めさせられ將軍に對し『卿が割腹して朕に謝せんとの衷情は朕能く之を知れり然れども今は卿の死すべき秋に非ず卿若し强いて死せんとならば宜しく朕が世を去りたる後に於てせよ』との意味の御沙汰あらせられたれば流石の將軍も君恩の渥きに感泣したるものと見え顏

色蒼然流汗背に洽ねく、一言の御答へ申上る勇氣もなく其儘御前を拜辭したるが陛下は希典の後姿を眺めさせたまひ、暫時は何とも御仰せ遊ばされざりしとかや、此時陛下の御側に侍立したりしは當時の侍從長德大寺老公、侍從武官長岡澤大將其他侍從武官、侍從等二三の人に過ざりしかば此光景を知る者殆んどなく全く秘密に附せられしを後日に至りて岡澤大將は或人に語たり。

恩賜の金を散じ盡くすこと

日露の役止みて凱旋したりし時希典は參内して、先帝よりの恩賜金を拜して退出し直に佛壇を清め父の位牌に燈明を献げ包を置きて祈念數刻に渡たるが、其後服部時計店に命じて部下に此金にて記念時計を作らせ幕僚に頒ちて一金も殘さざりき、されば希典の內室は其金高をさへ知らざりし。

學習院院長時代の事

○

學習院の院長室は希典自身の考案になりたるものにて室の四方に窓あり居乍らにして院內の各所を望見し得る樣に出來居れり。

○

希典は常に院內に泊りて自宅へ歸るは一月の內數回に過ぎず、常に生徒と起居寢食を共にし躬行實踐を以て子弟を導き擊劍水泳に至るまで老軀を提げて血氣の少年と技を競ひたり。三食の如きも生徒の取るを喫し他に何等の滋養物を用ゐざるより、石黑軍醫總監を始め希典を知れる醫師は其健康を慮り六十餘歲の老軀を以て發育力旺盛なる少年と同一食物にて其健康を保たんとするは生理上寧ろ無謀なり切ては乳なりとも攝取せられよと屢々勸告したれども希典は斷乎として其の勸めを退け依然粗食に甘んじたり。

○

學習院の學生制度は希典の院長たりしより、自ら軍隊的となれり。同院の級長

制度は其の意味性質に於て、大に他の中學校其他に於ける級長制度と異にし、幼年なる初等科生徒の間には必らず、上級の生徒一兩名級長として萬般の世話に當るは勿論、體操演習などの場合には分隊長小隊長の役をも務むる事となり居れり。されば若し幼年生徒に過失などありたる時は希典は必ず其の級長副級長たる人々を叱責して、幼年生徒に及ばず「部下が悪い事を仕たのは、所詮長者たるお前の注意が行屆かぬからぢや」と訓戒するを常としたり。

○

希典は毎日學習院正門の傍に出で既に始業時間に迫りたる頃後れ馳に登校する者あれば三軍を叱咤せし聲音高く「駈歩ッ」と浴せ掛くるにぞ學生は驚いて駈歩するを常としたるが猶も歩みを速めざる者あれば幾度にても「駈歩」を浴せて止まざりしとぞ。

○

修身の講堂に希典の軍服姿が多くの學生と同じ樣に現れるのは毎々の事であつた。撃劍の道場にも最先に現れて小兒を相手に丁寧に敎へる。「サア打て、打て」と面を出す生徒が老人だからと手加減でもすると、「夫んな力の入らぬ打方ぢや不可ん、最一つ、最一つ」と來る。力一杯思ひ切つて撲り付けると「よし〳〵」と頗る大機嫌でそれからそれと次のものを引受け幾ら稽古をしても倦み疲れたと云ふ氣色を見せなかつた。

○

學習院にて希典の常に宿つた部屋は生徒のと同樣の寢臺があつて、それに寢たのである。食事は三箇所に在る食堂で順次に生徒と一所に同じ食事を食べた。煙草や酒は嫌ではなかつたが院では酒は無論煙草抔も買つて備へてはあるが一本も喫つたことはない。

○

院の小使などに對しても希典は決して粗末な言葉を遣つたことなく、外へ出かける時分には必ず行先を言うて出るのが例でわざ〳〵門衞所迄行つて、俺は今から

何處そこへ行つて來ると云うて出ることにして居た。

○

學習院が現校舍に移轉する事となつたので同校はかねてより運動場が狹いので今度こそ充分の地所を取つて貰ひたいと運動部の委員連殊に野球部委員は非常の熱心を以て希典を訪問し野球グラウンドの新設について膝詰の談判に及び成る丈け擴く取り置かれん事を懇願した。默々として聞き終つた希典は其說明を聞き終りそれでは塀に沿つて長く地所をとつておけばよからう、さうすれば澤山のものが出來ると云うた。希典は野球は球投げだから二人で爲るものだと思はれたのだ、そこで各委員は顏見合はせながら更に部長を說いて院長に野球の說明をして貰ひ所謂ダイヤモンドなる約二千坪餘の地面を野球のために割くも決して不經濟でもなく贅澤でもないと話したので希典も充分に諒解し、然らばとて新にグラウンドを設置することになつたので現に目白の學習院グラウンドは、東都における最も完全なるものゝ一となつた。

○

或時短艇部の委員に新艇建造の議が出でた事があつた。軍服の希典は委員より此話を聞くとヨシと云ひ樣突然立ち上つて戶外に出て軍馬にヒラリと跨つて一鞭くれて騫地に何處へか駈け出した。やがて馬蹄戛々として歸校した希典は短艇部委員に向ひ「宜敷い短艇は造つてやる」と云つた。委員は益々腑に落ちず詳しく聞いて見ると希典は委員より話を聞くと其儘馬を海軍省に飛ばして古ボートの拂下げを契約したのであつた。弱つたのは委員連だ。海軍用のカッターと隅田川のレースボートとを一所にされては堪らぬので詳く說明すると希典は成程と計り、早速新端艇の建造を許した。

○

今年の八月大變雷の鳴つた時、希典は院の庭で頻りに草を拵つて居た。すると生徒達は「乃木さんは耳が遠いんだ、屹度さうだ」と云つたさうだが、實は耳が遠いのでも何でも無く、恁麼時に少年の士氣を勵さねばならぬと云ふので彼の老軀

を押して庭に出たのださうだ。

大館集作の事

○

希典の弟大館集作は數年前より長府町の郊外字谷山の山中人跡稀なる處に住へり、里道より溪谷を分けて登ること七八町にして藁葺の一家屋は是れ集作夫婦の寓居なり。集作は希典の意に隨ひ斯る邊僻の山中に居を卜するに至りしものなりとぞ。養父の隱居は白髮の老人にて今年七十七歳、集作は四十七歳となれど子なし。

○

希典は非常に弟思ひの人で、先年友人の桂彌一に對つて「弟の集作を立派な人格の高い人間にして遣り度い、就いては世話をして呉れる相當な人がなからうか」との話に、桂も種々物色した結果、會津藩の廣瀨安人が適當だと認め、一日同道

して希典邸を訪ひ紹介した。すると希典は大に喜び安人に對し「不肖な弟だが會津風に仕込で下さい」と依頼した。當時安人は會津に大農場を持て居たから集作を伴ひ歸つた。其後希典は弟の爲め那須野石林にある別莊つゞきの地を求めて與へ樣としたが纏まらない。折りしも舊藩主毛利家の農場監督が入用となり其人選を桂が依頼されたので集作を周旋する事とし、希典にはそれとはなしに話したが承知しない、と云つて明白に云へば猶更ら許さぬから桂は「集作の身の上は一切私に任て呉れ」と說き、長府へ伴ひ歸つて就職せしめた。集作は其後職を辭し獨立で百姓をして居るが、兩典の死後將軍の家の後嗣となる樣な場合が來ては兄の本意でないとて、自ら大館氏の養子になつた。

希典の名の事

希典が萩の玉木家に居りし頃は名を文藏と呼びたり。維新後今の希典と改名す。

渡邊石重丸の事

○

渡邊石重丸は今年七十七歳にて麹町區富士見町に住す。明治四十三年五月二十七日の早朝希典は自ら馬を驅つて渡邊を其宅に訪ねた。「突然參つて太だ失禮です、特に別に紹介狀も持たんで……私は乃木希典でありまするが是非とも老先生に御目に蒐つて御話が願ひ度い……」と例によつて丁寧なる挨拶、家人は乃木大將と聞いて早速座に請じ來意を糺ねると渡邊が明治二十二年中著作した「固本策」に就いて何かと話がして見たいと云ふ底意であつたらしい。その後希典は折々渡邊翁を訪ねた。渡邊も亦希典を赤坂に訪ねて時に靜子夫人とも語り合ふ仲となつた。

○

渡邊は平田派の屈指の學者で水戸系の學派を參酌した學者兼政治家肌の老豪傑とも云可く結髮を今に存して熾に國家思想を鼓吹して客を待つ。故井上毅氏は渡邊

を「日本第一位の精神家」と激稱し內藤恥叟翁は、「東湖以來の人物也」と云ひ、故鹿島則文氏は「日本一の師也」と師事したさうであるが希典は「老先生」と仰いで其の說を聽いた。

希典前に死に內室之に殉したりとの說

石黑忠悳氏曰く乃木の死んだのは鍵のかゝつた室の中である。ドウして夫婦が死んだのか何れが早く死んだのか何故に死んだのか之を斷定するの必要がある。嘗て幕末の名士川路左衞門尉と云ふ人が根岸に隱居してゐる時中氣に罹つたが德川家の末路を見屆けて短銃を以て自殺した。處が湯棺する時に腹を切つてあつたのが發見された。之れは武家の故實を踏んだもので私と乃木と相語つて實に用意周到な見事な死に方だと感心した事がある。君達でも私の前で腹を切つて御覽なさい私が縫て上げる決して腹を切つて死ぬるものではない。腹を切るのは古式に依るのだ。乃木は臟腑の出ないやうに、日本刀のサアベルで二度腹を切つ

てまた刄を内に向けて咽喉に右から入れて左に後ろまで貫いて頸動脈が切れて出血したのが致命傷である。私は始め乃木が夫人を刺して後に自盡したと思つてゐたのにさうではなかつた、現に夫人に宛た遺書があるのを見ても乃木は自分だけ死ぬるつもりであつたらしい、私の想像する處に依ると乃木は夫人に死を明したに違ひない。夫人は御始末を見届けますと安心させて後に自害したのである。大將の自盡も見事であるが夫人の自害の有樣は實に壯烈無比である。夫人は乃木の死を見届けて柑子色の袴に鈍色の袿を着て死んでゐられた。懷劍の銘は月山貞一（二十七年鍛つた銘あり）の作で創は四箇所であるがマア重なのは三箇所だ。第一創は胸の眞中で之れは胸骨があつて刺れないので引拔いて胸骨の側を突いた、之れが第二創で私が探りを入れると一寸五分程の深さで肺臟から心臟の一部に當つてゐる。處が夫人は之では死に遂げられないと思つたのか更に引拔いて心臟の眞中を刺したのである、心臟を刺す時には既に二箇所の重傷で痛みはある、體は弱つてゐるに違ひない。夫れに氣丈の夫人は懷劍を心臟に突立てゝ猶上から乘しかかつて體の重味で突刺た。其證據には右の親指に創がある。私は是れまで人の切腹するのも見たし屍體の檢案もしたが多くの者は一刀に死なねば死ねないものである。夫人は女ながらも三創を以て見事な死を遂げられた。乃木に安心させて自盡させ、自分も後で其後を追ふたのである。

希典の遺書の事

○

湯地、大館、玉木等に與へしもの

遺言條

第一　自分此度御跡を追ひ奉り自殺候處恐入候儀其罪は不輕存候然る處明治十年役に於いて軍旗を失ひ其後死處を得度心掛候も其機を得ず皇恩の厚に浴し今日迄過分の御優遇を蒙り追々老衰最早御役に立ち候時も無餘日候折柄此度の御大變何共恐入候次第茲に覺悟相定め候事に候

第二　兩典戰死の後は先輩諸氏親友諸彦よりも毎々懇諭有之候得共養子弊害は古來の議論有之目前乃木大兄の如き例他にも不尠特に華族の御優遇相蒙り居實子ならは致方も無之候得共却て汚名を殘す樣の憂へ無之爲め天理に背きたる事は致す間敷事に候祖先の墳墓の守護は血緣の有之限りは其者共の氣を付可申事に候乃ち新坂邸は其爲め區又は市に寄附し可然方法願度候

第三　資財分與の儀は別紙の通り相認め置き其他は靜子より相談可仕候

第四　遺物分配の儀は自分軍職上の副官たりし諸氏へは時計メートル眼鏡馬具刀劍等軍人用品の內にて見計の儀塚田大佐に御依賴申置候大佐は前後兩度の戰役にも盡力不尠靜子承知の次第御相談可被致候其他は皆々裁談に任せ申候

第五　御下賜品（各殿下よりの分も）御紋付の諸品は悉皆取纏學習院へ寄附可然此儀は松井猪谷兩氏へも依賴仕り置き候

第六　書籍類は學習院採用相成候分は可成寄附其餘は長府圖書館え同斷不用の分は兎も角もに候

第七　父君祖父曾祖父君の遺書類は乃木家の歷史とも云ふべきもの故嚴に取纏め眞に不用の分を除き佐々木侯爵家又は佐々木神社へ永久無限に御預け申度候

第八　遊就館へ出品は其儘寄附致し可申乃木の家の記念には保存無此上良法に候

第九　靜子儀追々老境に入り石林は不便の地病氣等の節心細との儀尤に存候故集作に讓り中野の家に住居可然同意候中野の地所家屋は靜子其時の考へに任せ候

第十　此方死骸の儀は石黑男爵へ相願置候間可然醫學校へ寄附可致墓下には毛髮爪齒（義齒共）を入れて十分に候（靜子承知）

恩賜を頒つと書きたる金時計は玉木正之に遺はし候筈なり軍服以外の服裝にて持つを禁じ度候

右の外細事は静子へ申付置候間御相談被下度候伯爵乃木家は静子生存中は名義可有之候得共吳々も斷絶の目的を遂げ度大切なり

右遺言如此候也

大正元年九月十二日夜

湯地定基殿　　大館集作殿

玉木正之殿　　静子殿

希典（花押）

○

桂與一に與へしもの

拜啓愈よ御健勝欣賀々々小生此度の儀は定めて御不同意と存じ候へ共三十五年前よりの心事已を得ざる儀と御あきらめ被下度候、集作（將軍の實弟大館氏）儀に就ては、一方ならず御懇情被下難有存じ候、例の石林（下野那須野の所有地）地所家屋は、愚妻も追々老境に入り候ては、不便の地骨も折れ候故に來春早々集作へ渡し度く、尚地つゞきだけは現狀を維持させ度くと申望みに就き、小生も同意致し置き候、此段御含みおき被下度候、嘗て梶山（元朝鮮公使鼎介氏）諏訪（陸軍少將好和氏）兩兄と御同席御懇諭家督相續の儀は毎時曖昧に御答仕候段御厚意に背き恐れ入り候、然るに養子の弊多きは勿論、特に華族に於て宜敷からざるの持論、自然追々御聞きにも相達し申べく不惡御承知被下度、長府舊知諸君へ御暇乞ひ貴兄より可然御傳へ相願候其爲め

匆々頓首

希典

九月十二日

桂彌一兄尊下

○

石黑忠悳氏に與へしもの

拜啓、愈々御健勝欣賀々々小生此度の儀は定めて御叱り無限の事と存候曾て御話申上候如く生存中碌々に御益にも不相立候骸骨故に醫學上何かの御用に相成候得ば骨にしてなり木乃伊にしてなり或は粉にして御捨て被成下候

ても更に遺憾無之愚妻も納得致し居候間可然御任せ申上候右御願迄御暇乞
旁如斯候頓首

九月十二日　　希典

石黒仁兄尊下

○

小笠原長生氏に與へしもの

拝啓
今般御歸京御面晤を得候儀は眞に望外の幸に候然に小生此度の處決は
西南戰以來の心事に候得共斯く畏くも御跡を追ひ奉り候樣の場合可有之と
は豫想も不仕恐入候儀に御座候空敷今日を過候而は月に加はる老衰碌
々御用にも不相立過分の御優遇に浴する事恐懼に堪へず如此次第不惡御海恕
被下皇室の御爲學習院今後の成立上御盡力の程吳々も懇願仕候右は御
暇乞御詑迄如此候　匆々敬具

九月十二日　　希典拝

小笠原長生賢臺貴下

○

阪本中將に與へしもの

拝啓小生此度の儀は其任を盡さゞるの罪科啻に我が皇室に對するのみならず
ンノート殿下卽ち英皇室に對し候て不相濟儀萬々恐入候得共此時機再び
來るべきものに無之斷行候今後の處宜敷御盡力被下度宮內大臣へは書面差
送候間或は更に後任も御命可有之存候マグドナルド大使へ閣下より宜
敷小生謝罪の心事御傳へ被下度奉願候稻葉吉田其他諸彥へ別に書狀相認め
不申是亦宜敷御致聲奉願候　匆々敬具

九月十三日　　希典

阪本中將閣下

○

其外學習院白鳥博士、福原文部次官兩氏宛一通、猪谷監事、松井主事兩氏宛一通田中少將寺内總督渡邊宮内大臣塚田大佐宛各一通なり。

祭粢料を賜はりし事

天皇皇后兩陛下、皇太后陛下、皇太子殿下、雍仁、宣仁兩皇子殿下には深く希典生前の功勞を思召され九月十八日左の如く祭粢料の御下賜あり、

天皇皇后兩陛下より　祭粢料
一、金五千圓

皇太后陛下より　祭粢料
一、金二千圓

皇太子殿下より　祭粢料
一、金三千圓

雍仁、宣仁兩皇子殿下より　祭粢料
一、金二千圓

希典夫婦葬儀の事

九月十八日午前十時聖上陛下には、高辻侍從を乃木邸に差遣はされて、希典の靈前に素絹二匹、紅絹二匹、神饌三臺、眞榊一對を、皇后陛下には、馬場主事を御使として、眞榊一對を、皇太子殿下には、甘露寺侍從を御使として、御玉串を、兩皇子殿下には松平御用掛を御使として御玉串を賜はりぬ。乃木家總代重見陸軍少將卽時參内、謹しんで御禮を言上す、又英國コンノート親王殿下よりは花環一個御贈賜相成り、メスエーン元帥、ボー海軍大將以下隨員一同も花環一個を寄贈し、伏見宮博義王、山階宮武彦王、同芳麿王、賀陽宮恒憲王、久邇宮朝融王、同邦久王の各殿下には、何れも學習院の御制服にて乃木邸に御成御拜あらせらる。午後一時棺前祭行はる。喪主玉木正之、主人側總代大館集作、夫人側總代湯地定基、其他親戚各將校の參拜あり。午後二時三十分、一聲の喇叭を合圖に、

前驅者及び眞榊、花環、旗持等の列を整ふ。二時五十分二聲の喇叭を合圖に、柩車、柩馬車の準備にかゝる。三時を報ずると共に、希典が柩を柩車に、內室の柩を馬車に遷し、希典の柩車には上村海軍大將、土屋陸軍大將、八代海軍中將、大島陸軍大將外十七名の陸海軍將校、學習院教授等棺側に隨ひ、內室の柩馬車には、長谷川榮作、深澤政介外十三名の親族附添ひたり。壯烈なる最後を遂げし偉人夫妻の遺骸を納めたる二つの柩は、恁くて久しく住み馴れたる赤坂新坂町の邸を出づ。三稜角形に前驅せる憲兵三名に次で、學習院學生數百名は、肅肅として進む。其後よりコンノート殿下を初め奉り隨員諸氏よりの花環、英國大使其他各國大使、公使よりの眞榊、湯地、大館、玉木氏等を初め各親族、舊藩主毛利子爵家、伏見、有栖川、閑院其他各宮殿下等よりの眞榊、天皇皇后兩陛下より御下賜の眞榊、紅白の旗十二旒續く。何も軍服正しき在鄕軍人之を捧持し、人夫一人も交へざるは前代未聞の盛儀なり。神官五名は一頭馬車三輛に分乘し、齋主千家尊弘氏と副齋主は各々二頭立馬車にて進む。勳一等旭日桐花大綬章を初め金鵄勳章功一級以下の勳章は各將校八名、英皇より拜受の最高勳章ヴイクトリアはジーピコット工兵大尉、グランドグロス、オブ、ゼ、バウス勳章はエーマイナー印度軍醫部大尉捧持し「軍事參議官陸軍大將從二位勳一等功一級伯爵乃木希典之柩」と記せる銘旗を先立てゝ將校一名、下士卒二十一名に輓かれたる砲車の上に安置せる希典の柩進む、愛馬三頭首を垂れ悄然として從ふ。之に次で「陸軍大將伯爵乃木希典夫人靜子之柩」と大書せる銘旗を前にし、親族等に侍せられ柩は馬車にて進む、喪主玉木少佐に次ぎ湯地定基、大館集作氏以下の親族、婦人會葬者等及び寺內、長谷川兩大將以下の葬儀委員、親任官、勅任官、學習院總代、貴衆兩院議員、學習院職員其他の會葬者等順次徒步にて從ひ、一絲亂れざる行列は新坂通りを青山御所前に出で、柩少時止りて御所に御告別申上げ進んで青山三丁目より左折し青山齋場に入る。かくて二つの柩は砲車及び馬車より下され場の中央、向つて右に希典、左に內室の柩を安置す。銘旗を棺側に樹て兩陛下御下賜の眞榊を左右に供ふ。弔砲

轟然として鳴響き、續いて閑院宮、伏見宮、コンノートの各殿下御臨場あり。場の右方は喪主玉木少佐、湯地定基、大館集作二氏以下の親族及び各婦人會代表者、學習院女子部女教員、女學生總代、寺内、長谷川、大島大將以下の葬儀委員左方にはコンノート殿下、伏見、閑院、竹田三宮殿下其他各宮御代拜者、大山、奥兩元帥、大隈伯其他の親任官及び英國大使以下各國代表者等のみ入場着席し、伶人奏樂の間に千家齋主、竹崎副齋主以下の神官は禊を了り、柩の前に神酒洗米及山海の神饌、幣帛を献り、崇嚴なる祭儀を修す、千家齋主祭文を誦し『夫婦相併て御身を捨て、遠く後の世かけて、尊き教を遺し玉ひし事を、恐み畏み白す』と結ぶに至り、各殿下を初め參列の人々堪り兼て獻欷の聲暫く止まず。祭文了りたるは四時、勅使高辻侍從、皇后宮御使馬場皇后宮主事、皇太子殿下御使甘露寺東宮侍從、兩皇子御使松平御用掛相次で御臨場、紅白の幣帛垂れたる玉串を献じさせ玉ひて直に退場あるや、コンノート殿下先づ柩前に進ませられ、暗涙を催させ乍ら擧手しつゝ少時默禱あり。次で伏見、閑院、竹田の三宮殿下玉串を捧げ玉ひ、夫れより各宮家御使の玉串献供ありて喪主玉木少佐以下近親又玉串を献じ了れば、英、佛、露、伊、獨、米各大使及び墺、瑞、西、墨、和、伯、暹、白、智、葡、那、丁、亞爾然丁、各公使代表者に次ぎ、大山元帥、大隈伯、德川家達公以下拜禮して退場す、場前には奥元帥、寺内、長谷川、川村、大島各大將、石黒總監、木戸侯、大井、河合、田中、三少將、小笠原海軍大佐等整列して一々會葬者に謝意を述ぶ。學習院有志會、横濱奬兵義會長、通俗教育會長、東洋協會副會頭、帝國在鄕軍人山口支部長、山口聯隊區將校團、東京女學館職員生徒總代其他二百五十通の弔詞は總て朗讀を廢し柩前に供ふ。是より先喪主玉串を献じ了たる際大井少將は儀仗の堵列兵指揮官に陳謝の挨拶を爲し同時に柩通過の時と同じき喇叭『哀の曲』に次ぎ弔銃三發づゝを發す。斯くて祭式了れば旅順勸降の軍使たりし山岡盲中佐人に手を曳かれつゝ先づ玉串を捧げ、勅任官以下の參列者及び、征露第三軍の戰死者遺族三百名、東京廢兵院の廢兵三十餘名希典の別莊地たる那須野の農民百餘名續いて參拜し、次

で一般の參拜を許す。老若男女先を爭うて柩前に額くもの實に五萬餘、午後六時日暮るゝ頃入場を禁じ、神饌、幣帛を撤して爰に全たく葬儀を終れり。午後六時夫妻の柩は、前の如く砲車幷に馬車に移され、先驅の騎兵、各宮殿下、兩陛下よりの眞榊、銘旗に次ぎ、喪主、親族葬儀委員棺側の人々に侍せられて人垣の間を乃木家の墓地に至る。沿道には新設の電燈、物凄しく墓間の青葉を照す。墓穴は故兩典氏の碑石に面して掘下げられ、希典の柩を右に、內室の柩を左に石壁一重を隔てゝ石槨の中に下す。時正に六時半、轆轤の音悲しく軋りて涙を誘ふ。墓誌銘柩上に奉安され更に石戸を覆ひセメントにて固め了れば、喪主以下土を投じ玆に偉人女丈夫は永劫の眠に就き了んぬ。

碑銘の事

陸軍大將從二位勳一等功一級伯爵乃木君墓誌

君諱希典山口藩士族希次君第三子也母諱壽子嘉永二年十一月十一日生於武藏江戸維新初爲御親兵掛明治四年任陸軍少佐十年西南之役連戰有功進中佐十六年累進少將二十七年日清之役以第一旅團長入金州二十八年進中將補第二師團長攻臺灣取之以功賜勳二等旭日重光章功三級金鵄勳章特列華族授男爵二十九年任臺灣總督三十一年任第十一師團長三十六年叙勳一等賜瑞寶章三十七年日露事起補第三軍司令官任陸軍大將旅順之戰攻圍半歲遂克之三十九年補軍事參議官是歲以功賜旭日桐花大綬章功一級金鵄勳章四十年兼任學習院長叙從二位陞授伯爵四十四年隨依仁親王赴英國大正元年九月英國親王來列大喪儀君爲其接伴員是月十三日薨亨年六十四君嚴毅方正力行不倦儉素自持常以忠孝戒飭子弟先帝崩御哀悼殊甚大葬之夜遂自刄逝夫人湯地氏亦以是日殉焉其十八日葬青山塋域君有二男長勝典次保典俱戰歿於旅順之役

乃木伯爵夫人墓誌

夫人諱靜子鹿兒島藩士湯地定之君第四女也安政六年十一月二十七日生於薩摩鹿兒島明治十一年嫁乃木氏十二年生勝典十四年生保典夫人溫良質素不飾邊幅日露之役

伯爵出征夫人在家助恤兵及後援事大正元年九月十三日伯爵薨夫人殉之享年五十四葬於青山塋域

希典、僕婢にやさしかりしこと

希典は婢僕に對して怒ると云ふことがなかつた、日露戰爭前希典隼と云ふ當四歲の馬に騎りて華族會館に行つた、歸りには馬丁が其馬に乘つて門外に出ると馬は何者にか驚いて逸走した。故に馬丁は力限り手綱を緊たので其の途端に前膝を折つて膝頭を負傷した。馬丁は主人の愛馬を負傷せしめたので非常に恐懼し直に引返して希典に此事を告げると希典は只馬の手當のことのみを繰返へし言付けたが少しも馬丁を叱らなかつた。

希典の生活の質素なりしこと

希典の屋敷に於ては牛鳥肉は勿論魚肉まで食膳に上すことを斷ち麥飯で而も往々稗の現はるゝ事のある粗餐に野菜物のみを食して之に甘んじ些かも奢る氣色なく上は希典夫婦より下は馬丁下婢に至る迄均しく同一食物を供へて別け隔することなかりき。されば初めて來た下女などは迚ても此樣子にては永く耐へられないと云つて暇を請ふものもあつた。

希典年金廢止論を唱へしこと

明治二十三年金鵄勳章制定の議ありし時希典は戰功ある軍人に勳章を授くるは當然の方法なれども之に年金を附するは考へ物なり。由來軍人は廉潔を尙ぶべきものなるに多額の年金を與ふることは反つて奢侈淫逸に流れしむるの虞れあり、故に年金の制のみは斷じて廢されたしと極力反對したれども希典の說は遂に當路者の容るゝ所とならずして止みき。

希典商人を嫌ひしこと

希典は商人が嫌ひであつた。不正な事をしなければ商人にはなれぬであらうと思ふなどゝ言つたこともあつた。

日清戰爭の時乃木大將の廣島にてよみし歌の中に

數ならぬ身にも心のいそかれて夢やすからぬ廣島の宿

同じ頃玄海灘を過くるとて大將のよみける

すめらきの我大君のいくさ船向ふ舳に波風もなし

大將は痩軀長身、正直一圖、多感多情、細心にして數理的腦髓を有し、虛飾を嫌ひ、口舌に短く、禮儀に篤く、謙讓の德に富む。人を惠んで語らず。金を散じて得色なし。家に在りて軍服を脫せず。口に寒暑を說かず。平生他の嗜好なし、好んで詩歌を詠ず。

語らしと思ふ心もさやかなる月には得こそかくさゝりけり

しこ草の茂れる中に紅の色もさやけき大和撫子

仰きみれは心も空にすみ渡り朝日照りたる富士の神山

峻嶒富嶽聳千秋。　赫灼朝暉照八洲。

休說區々風物美。　地靈人傑是神州。

共に其懷抱を窺ふに足る。

乃木大將

終

5
7

大正元年十月九日印刷
大正元年十月十二日發行
昭和三年二月廿八日改版

不許複製

乃木大將奥附
定價金八拾錢

著作者　山路彌吉
發行兼印刷者　東京市京橋區日吉町　渡邊爲藏
印刷所　東京市京橋區日吉町　民友社
發行所　東京市京橋區日吉町　民友社

民友社出版圖書目錄

東京市京橋區日吉町
振替東京一三一〇〇

蘇峰　德富猪一郎　著

近世日本國民史

特色本領の一二

◆歷史講究熱勃興　當今の社會に歷史講究熱が、蓊然として興つて來たのは、邦家前途の爲め慶賀に堪へぬ。これは『近世日本國民史』の刺戟の力、與つて大に居るとは、朝野識者が萬口一聲の批判である。

◆獨闘創造の歷史　近世日本國民史は、其の材料の精確詳審であるのみならず、成る可く前人の功を沒せざる爲めに其の史實を採用するのみならず、其の歷史的人物、若くは人物に關係ある權威者をして自ら語らしめてゐる。國民史は著者の獨闘であり、創造である。

◆胸中の一大樓閣　著者は胸中に一大樓閣ありて、其の資料に古人を使用する迄で、この偉大なる國民史は、著者の匠心獨造である。帝國文獻の有する曠古の一大產物である。

◆特色は綜合大觀　一室には一室の用があり、一階には一階の用がある。然も其の特色は、之を綜合大觀せねばならぬ。蘇峰先生の國民史、亦如此耳。併し國民史を以て、單に世の所謂る歷史と同一視するは、大なる間違だ。歷史は歷史だが、從來の歷史とは、全く其の本領、面目、趣向を異にしてゐる。

◆時代潮流の活描　それは著者は一方に人を見、一方に勢を見。一方に心を見、一方に肉を見、一方に思想を見、一方に生活を見。而して兩者が社會を經緯して、時代の潮流に從て動く情態を描き且つ叙し、且つ論するからである。これ從來の史書に見る能はざる特徴の一だ。

◆秩序的百科字彙　されば國民史は、近世日本のあらゆる寶庫だ。政治でも、經濟でも、文學でも、宗教でも、美術でも、哲學でも、風俗でも、商業でも、工業でも、農業でも、世の中の森羅萬象、殆ど悉く其の大綱大要を囊括して漏らす所がない。されば國民史を以て、秩序的の近世日本百科字彙と云ふも妨げまい。

近世日本國民史

(1)	織田氏時代	前篇
(2)	織田氏時代	中篇
(3)	織田氏時代	後篇
(4)	豐臣氏時代	甲篇
(5)	豐臣氏時代	乙篇
(6)	豐臣氏時代	丙篇
(7)	豐臣氏時代	朝鮮役 上卷

本篇は近世日本國民史の最源頭をなすもので、筆を室町幕府の末期に起し、其の衰亡に止む。眞に信長の覇業創始時代の記錄也。

本篇は信長が、鋭意努力の時代を叙述したるもので、長篠戰爭を始め、安土城の經營、毛利氏との關係、丹波方面の手入れ等に至る。

本篇は信長が最活動最得意の時代を叙述したもので、武田氏の滅亡、信長父子の死等を描き、最後に信長の全體を顯現したるもの。

本篇は秀吉の素生出身に筆を起し、後織田氏時代に接續して、秀吉の創業時代を叙述したもので、一代の英雄秀吉の立志傳なり。

本篇は秀吉が五十一歲から、五十三歲に至る最も油の乘りたる期間の記錄で、秀吉の生涯中最得意の時代である。

本篇は秀吉時代の落著を示し、北條氏退治を骨子として、東北の平定、家康の移封の他に、我使節の羅馬入りに及ぶ。

本篇は著者が最も精力を傾注し、大和民族の海外葛藤より、秀吉の外征、行長の平壤入り、其他日本軍制海權の失墜に終る。

上製　菊判　定價　各五圓　送料　各十錢
並製　四六判　定價　各三圓　送料　各二十錢

近世日本國民史

(8) 豐臣氏時代戊篇 朝鮮役 中卷

本篇は朝鮮役に於ける日明外交史にして、朝鮮が明の救援を請ふに始まり、明の神宗皇帝が秀吉を日本國王に封ずるに終る。

(9) 豐臣氏時代己篇 朝鮮役 下卷

本篇は朝鮮役の總勘定にして、講和評定の經緯より秀吉の死と日本軍の總撤退に至り、關白秀次の破滅秀頼の成立を叙す。

(10) 豐臣氏時代庚篇 桃山時代概觀

本篇は日本歴史に磨滅すべからざる華麗絢爛たる文化の一時期を劃した、桃山時代の多趣多様、各種各方面に亙る特色、概觀を描く。

(11) 家康時代 上卷 關原役

本篇は秀吉死後の形勢より、關原一戰に於て石田三成が家康と雌雄を決せんとして、如何に震天動地の活劇を演じたかを叙す。

(12) 家康時代 中卷 大阪役

本篇は天下の名實德川氏に歸し、遂に大阪冬陣夏陣の開始となり大阪城陷り豐臣氏全く亡ぶるの狀を叙したる哀史なり。

(13) 家康時代 下卷 家康時代概觀

本篇は家康の人物と、其の一生の事功とを精審に叙述したもので、德川幕府施政の根本義に始り、家康の臨終に至るまでを記述す。

(14) 德川幕府 上期上卷 鎖國篇

本篇は鎖國政策に關聯した内外一切の出來事を、豐富なる材料と精嚴なる史筆とに因りて叙述したもので、島原役の顚末等をも記述す。

上製 菊判 定價 各五圓 送料 各十錢
並製 四六判 定價 各三圓 送料 各十二錢

近世日本國民史

(15) 德川幕府 上期中卷 統制篇

本篇は、幕府對朝廷關係の記述で、朝幕衝突を始め、諸大名改易、親藩連枝處置の顚末の如き、最も幕府の醜惡を抉出す。

(16) 德川幕府 上期下卷 思想篇

本篇は尊王及び國體の思想の胚胎と、發達の來歴を記述し、殊に水戸光圀に關しては特筆大書し、由比正雪事件に及ぶ。

(17) 元祿時代 上卷 政治篇

本篇は幕府の政治を記述すると共に、綱吉公、桂昌院、堀田、柳澤等の人物を批判し、時の後光明天皇の御事をも記載す。

(18) 元祿時代 中卷 義士篇

本篇は赤穗義舉事件の記述で、單に興味中心を目的とせず、其の原因を究め、世論を批判し獨特の觀察の下に成る眞の義士觀なり。

(19) 元祿時代 下卷 世相篇

本篇は元祿時代各方面の代表的人物と、業蹟を記し、瑞賢、奈良茂、辰五郎等の實業家や、西鶴、近松、芭蕉、狩野、英、等を擧ぐ。

(20) 元祿享保中間時代

本篇は家宣、家繼時代に、新井白石が如何に活躍したかを精叙し、羅馬人シドッチの渡來、江島事件等を特筆して概觀に及ぶ。

(21) 吉宗時代

本篇は將軍政治中興の一時期たる吉宗時代の施設萬般を縱横に叙述し、吉宗の人物は勿論、更に文敎發達の方面をも特筆した。

(上製)價 五、〇〇 送 一、一八
(並製)價 二、五〇 送 一、一二

上製 菊判 定價 各五圓 送料 各十錢
並製 四六判 定價 各三圓 送料 各十二錢

近世日本國民史

(22) 寶曆明和篇	本篇は桃園天皇を中心としたる、攝家對平ら公家の葛藤、竹內式部、山縣大貳の二大事件を詳述し、幕府倒壞の因を說く。	
(23) 田沼時代	本篇は田沼時代に向つて嚴正なる批判を下し、田沼意次の人物を詳細に解剖し、蘭學興隆を物語り、上杉鷹山の劇的場面に及ぶ。	
(24) 松平定信時代	本篇は時の老中松平定信を中心として當時の諸相を評述批判し、就中光格天皇の尊號宣下事件を解剖論評した點本書特獨。	
(25) 幕府分解接近時代	本書は德川十一代將軍家齊時代、幕府の崩壞する勢を解き、外國船の接近に國防論尊王攘夷論の湧出を述べる。	
(26) 雄藩篇	本書は德川末期に於ける諸藩の形勢を論じ、殊に薩摩、長州、水戸の三大雄藩を論評す、蓋し此の三雄藩は維新に最も活躍せるもの。	
(27) 文政天保時代	二月下旬刊行	
(28) 天保改革篇	續刊	

上製菊判定價各五圓・送料各十八錢
並製四六判定價各二圓五十錢・送料各十二錢

紀元節發刊

蘇峰叢書

二月十一日は日本帝國建立の日だ。此の日出度き日に本叢書を發刊する。蓋し、本叢書は蘇峰學人の最近十數年に於ける文筆生活を代表する金字塔である。紀元節に第一册「皇室と國民」第二册「名山遊記」を出版し爾後毎月一册の割合にて續刊する。その種目は天然、政治、文學、宗教、美術、風俗、その他凡そ人間生活に觸れるもの總てに亘つてゐる。本叢書は正に大正、昭和の日本を表象する活時代史である。

第一册　皇室と國民
第二册　名山遊記
第三册　國民と政治
三月發賣

四六判二五〇頁內外
毎册定價五拾錢
送料毎册八錢

財團法人 青山會館編纂	蘇峰 德富猪一郎著	
甲東先生遺墨集	南洲先生遺墨集	大久保甲東先生	西鄉南洲先生
本書は維新後傑中、現代に於ても最も一般民衆に欽慕さるゝ西鄉南洲先生の人物とその事業とを論評せしものなり。	本書は維新の偉傑甲東先生に對する世人の誤解を一掃し、先生の眞の力量、手腕、人物及びその事業とを評論す。	一卷を開かば天挺の大人豪の風丰眼前に躍出し、無限の大教訓を享受し得べく現下風歎興德の源泉である。	本集は南洲先生遺墨集と共に日月の如く并び懸けて靑史を照破し、四海忠義の心を振起するの一大寶訓なるを疑はず。
四六判 定價六拾錢 送料四錢	四六版五百餘頁 定價貳圓 送料十二錢	百三十點 定價拾五圓 送料一圓	百六十點 定價拾五圓 送料一圓

蘇峰　德富猪一郎著

國民小訓
天覽台覽　久邇大宮殿下より本書嘉稱の玉詠漢詩御下賜
附錄＝涵情養氣集

忠君愛國の護符、憲政教義の絶好讀本、眞に國民醒覺の教訓書。附錄に和歌八十首、漢詩九十絶を收む。孰れも國民の志氣を振作するの隨一資糧。日夕諷誦の絶好伴侶。
（文部省認定）

菊判並製　二四〇頁　定價八拾錢　送料八錢

縮刷國民小訓

「國民小訓」愛讀者諸氏の熱誠なる御要求に應じ、携帶に便にして而かも蕭洒なる縮刷版。
改訂（文部省認定）

菊判並製　定價五拾錢　送料六錢

家庭小訓

家庭に於ける實用的心得を示したもので家庭や女學校に備ふべき書。
改訂（文部省認定）

菊判並製　定價五拾錢　送料六錢

處世小訓

如何にして世に處すべきかを平易に說いたもので、實に出世の好指針。

菊判並製　定價五拾錢　送料六錢

昭和一新論

本書は「國民小訓」の姉妹篇として昭和御代劈頭に著はされし物。過現未を達觀しよく宇內の趨勢を洞察しての立言なり。

菊判　定價六拾錢　送料八錢

民友社編輯部編纂

國民小訓字解
家庭小訓字解
處世小訓字解

何れも出來るだけ精確丁寧に字解を附し、著者述作の精神の諒解に努む。

定價參拾錢　送料四錢
定價貳拾五錢　送料二錢
定價貳拾五錢　送料二錢

蘇峰　德富猪一郎著

大正の青年と帝國の前途

日本帝國の使命遂行と、國民の覺悟とに就て、大正の青年の精神元氣を、鼓舞作興した國運興隆の指針盤。

三六判上製　定價貳圓　送料十二錢

時務一家言（改版）

蘇峰先生の思想經綸の大經大綱を說示した書で、其生命を打込み、熱血を注ぎたる述作言論の精粹。

四六判上製　定價貳圓　送料十二錢

大和民族の醒覺

日米問題に關して、蘇峰先生が幾多の醒覺を力說された警告書で、同胞諸君の自奮を促がす必讀書。

四六判上製　定價貳圓　送料十錢

三十七八年役と外交

日本國の血を湧かした、三十七八年役の外交機密を、當時崇議に參與した著者が公平に批判し、赤裸に暴露した世界的奇書。

四六判上製　定價壹圓　送料八錢

精神の復興（蘇峰文抜萃）

如何にして國民的精神を興隆し、實力を養成すべきかを啓示した、愛國的熱誠の溢れたる精神復興の指針。

四六判並製　定價貳圓五拾錢　送料十二錢

政界の革新（改版）

清浦內閣を中心として一世を震駭したもので政界の革新を絶叫した活文字。

菊判　定價半截　送料五拾錢

吉田松陰（改版）

維新改革時代の代表的人物たる松陰の眞傳として、唯一なる獨特の權威を有す。青年諸君の一讀を待つ。

四六判上製　寫眞筆跡入　定價貳圓五拾錢　送料十二錢

靜思餘錄（改版）

蘇峰先生の廿五歲より卅二歲に至る時代の精神的結晶品で、最も用筆の韻致に饒み感興不盡の名著。

三六判上製　定價貳圓　送料八錢

烟霞勝遊記（還曆記念出版）上卷下卷（品切）

蘇峰先生の興味饒き勝遊の產、多彩なる名勝記、又胸底湧出の印象記で、足跡北海道より滿鮮に連る。感興不盡、紀行文の隨一、旅行の好伴侶。

風景人物寫眞二百餘入　定價參圓五拾錢　送料十二錢

蘇峰　德富猪一郎著

蘇峰隨筆
先生の學問、識見、趣味、修養、好尚、即ち全人格が最も鮮明に發揮せられたもの。自然、人事、群籍、思索の隨感隨錄、風趣橫溢。
四六判上製　四五〇頁　定價貳圓五拾錢　送料十

第二蘇峰隨筆
概ね震災後の起稿で、從つて記述眞劍味多く、讀者の感興を惹くこと深し。其の執れにも先生獨特の觀察識見あり。隨筆の絕好。
四六判上製　四四〇頁　定價貳圓五拾錢　送料十

第一人物隨錄
獨特の眼孔筆致を以て、東西古今の人物を捉へ來りて、能く其の眞を傳ふ。著者が『書くことを禁じ得ざる刹那に於て書いた』ところに本書の眞價がある。
四六判上製　四六〇頁　定價貳圓五拾錢　送料十

野史亭獨語
本書は蘇峰先生が湘南逗子の野史亭に於て、餘史の餘課産み出したる隨感隨筆、六十四題を收む。其の題目內容の豐富なる、記述の小の精明淨潔なる、讀者叩くに從ひて、大の響之れに應するの妙がある。
菊判上製　四六〇頁　定價四圓八拾錢　送料十

賴山陽
賴山陽は著者幼少の頃から、愛好傾倒した人物の一だ。本書は三十餘年の間博搜した資料と研究した識見とを以て、大處より大觀したる力作。山陽の全面目躍如。
四六判上製　一八〇〇頁　定價拾八圓　送料五十四錢

德富猪一郎　木崎愛吉　光吉元次郎　共編

賴山陽書翰集（上下）
本書は弘く江湖の所藏を探求して得たるものを、嚴密なる考證研究の下に、年代順に分類編纂したるもの。自ら山陽自叙傳を大成したる空前の產物。
四六判並製　定價壹圓五拾錢　送料十

故櫻痴居士　福地源一郎著　蘇峰學人序

改版　**幕府衰亡論**
本書は幕府衰亡の因由、歸結を詳論して、必讀の價値ある名著。觀察正鵠、意見公正、論斷穩當、而して平明、淡泊、然も情と理と勢とを揣摩して要領を得たるところ無比。
菊判地圖　寫眞十數葉入　定價參圓五拾錢　送料十八

井上雅二著　蘇峰學人序

西半球を巡りて
著者は世界を家として、足跡渾球に普し。本書は南北中米十二ケ國、三萬七千餘哩の視察歷遊の記。山川風物を活寫し、海外發展國策の經綸を絕說する快著。
菊判和製　定價參圓　送料十二錢

大谷光瑞師著

新刊　**無題錄**
第一編、第二編、第三編
第一、第二編各價八拾錢　第三編價八拾五錢　送(各)、二錢
新鑾上人の胸中燦たる光明に滿つ極樂の莊嚴を科學的に表現したるものは即ち本書である。
四六判　定價貳圓　送料八錢

極樂莊嚴

濯足堂漫筆
師一流の獨特の紀行感想隨筆等を收むること甞有餘篇、何れも多彩豐潤、津々たる興味盡きざる新集を見よ。
四六判　定價貳圓　送料十錢

孫子新註
孫子の本領は外交經世の眞髓を說くにある。是れを有して國家榮え、是れを讀みて國民昂る。蓋し人生の好指針である。
三六版　定價壹圓　送料六錢

佛說阿彌陀經講話
西方淨土の本願は此の經典より流出す。本書は光瑞貌下の詳釋本にして、その博學と懇切とは正に賢師慈父の感あり。
四六判　定價壹圓　送料六錢

般若心經講話
光瑞師の多年の研究に依て成れる書。其の該博の蘊蓄を傾倒したるものだけに、渾然之を融一してゐる。
四六判　定價七拾五錢　送料四錢

佛教の原理
本書は師が博大なる科學的智識を傾倒し佛教の原理を解釋闡明したもので、一讀以て其の深甚微妙の眞理に到達す。
四六判　定價壹圓五拾錢　送料六錢

第一義諦
本書は光瑞師の著書中に於て最も光彩陸離たるものにして、玄關を極めたる佛教の眞諦を說く獅子吼なり。
四六判　定價壹圓五拾錢　送料六錢

眞見大師
本書は大師の裔孫たる光瑞師が大師の信仰と人格とを詳述されたるものにして、大師の面目躍如たるものがある。
菊判和製　定價參圓　送料十二錢

國民パンフレツト

國民新聞編輯局編

普通選擧早わかり
國政 國民新聞 政治部 新聞編
普選擧の内容を平易に、親切に説明したもので參考資料をも收めた類書中の覇王なり。
小形美本 定價參拾錢 送料二錢

普選ポスターと新戰術
現代はポスターの時代なり。ポスターは直接簡。明なる武器。本書は各國と我國各政黨のポスターと普選常識手引を備ふ。
四六判 定價四拾錢 送料六錢

地方普選早わかり
——府縣會議員選擧の心得——
國民新聞編輯局編
本書は府縣會議員普選の常識、及びそれに必樞なる法文を收めしもの。「普選ポスター」と新戰術」の姉妹篇。
四六判 定價參拾錢 送料四錢

街頭經濟
國民新聞經濟部編
本書は日常誰人でも見聞する物に就て平易に經濟的立場より詳述する。例へば「虫賣り」「花賣り」「ブロカーガー」の如し。
四六判 定價五拾錢 送料四錢

歐洲の獨裁政治
伊藤龜雄著
本書は大戰後に於ける歐洲諸國が如何に獨裁政治に傾いてゐるかを論述したるものなり。

我國の無產政黨
井口一郎著
本書は近來我國に現はれ、殊に普選後は興味の中心ともなるべき無產政黨の生立を述べしもの。近代人必讀の書なり。

地租委讓問題論戰
——武藤金吉、菅原通敬兩氏——
地租委讓問題は財政經濟上の問題たるのみならず、今や我國政治問題中にても重要なる問題となつた。本書は朝野を代表する二氏の論戰なり。

貴族院改革と現制度の運用
公爵 近衞文麿述
今や貴族院は益々民衆と離れ行く感あり。この時に當り甲冑の新人近衞文麿公の貴革の叫びや、眞にわが意を得たものでなければならぬ。

生活問題と經濟思想
經濟學博士 阿部賢一著
本書は難かしい經濟學を斯くも平易に斯くも丁寧に述べたるもの。實に世人の生活を洞察せる博士の優しき指導書である。

各 四定送 價料 六貳拾錢 判錢 四定價 六貳拾錢 判 送料四錢

蘆花 德富健次郎著

自然と人生
改版
萬人の胸に徹する魅力ある本書は、實に現今に至るまで、其の需要は出版界の記錄を破る。精彩ある自然と人生のスケツチを見よ。
菊半截並製 定價六拾錢 送料四錢

不如歸
改版小說
讀書界の視聽を集めた本書は、津々浦々にまで知られた武男と、浪子を中心とした悲愴な物語で、何人も一度は手にすべき不朽の名篇。
四六判美本 定價壹圓 送料八錢

思出の記
改版小說
著者の初期の傑作で、主人公の幼時よりの運命の曲折と、生存の惱みと、戀愛の歡喜と、結婚の幸福を描いた長編小說。
三六判 布裝美本 定價貳圓 送料八錢

名婦鑑
改版
本書を一度繙けば世界古今の名婦を一堂に聚めて相語るの思ひがある。古の名婦の跡をたづね現今の名婦の事業と人物を知るは女性そのものゝ眞價を知ることである。
四六判美本 定價壹圓 送料六錢

農村問題四名著

村の辻を往く
農學博士 小野武夫著
本書は各方面より見たる農村生活の改善等を實際の例を擧げて、極めて面白く平易に論述したる近來の快著。
四六判並製 定價六拾錢 送料四錢

現時の農村問題
農學博士 中島九郎述
米國問題、小作爭議、農村生活の改善等、其他農村に於ける現代の政治、經濟、社會上多くの問題を實際より研究した良書。
四六判並製 定價六拾錢 送料四錢

丁抹の農村と其の教育
フォート博士原著 水野常吉譯
世界的唯一の模範たる丁抹の農村と教育とを說ける農村問題解決の鍵にして、國富增進の典型を明示したる利用厚生の好指針。
四六判美本 定價貳圓 送料八錢

農村問題講演
フォート博士述
斯界の世界的權威者たる博士が、先年來朝の際、我が農村問題の解決に一大刺戟を與へられたる農村及び教育問題の講演集。
四六判並製 定價八拾錢 送料六錢

正岡子規 監修

新俳句

明治類題の句集で、題目の豐富、句數の多饒なることを特色とせる斯界の瓦書。子規居士の監修に高き識見を覗ふべし。

四六判美本 定價壹圓 送料八錢

國民教育會編

現代文化と教育

故厨川博士、深田博士、阿部帝大教授、菅原博士、上野帝大講師、澤柳博士、入澤帝大教授等の文化教育の講演集にして、絶好の必讀書。

本會新設講座の第一回講演筆記である。理論と實際の兩方面から説いた修身科の研究。教育者諸君補習用の絶好書。

師範大學講座第一輯

修身科

神教、佛教、基督教、儒教即ち世界四大宗教の眞髓を四大家が最も短的、而かも平易に叙したるもの。今まで求めて得られざりし書。

師範大學講座第二輯

宗教科

四六判 定價壹圓五拾錢 送料八錢

文學博士 澤柳政太郎編

現代教育の警鐘

本書は我國唯一の實際教育の研究學校たる所の成城小學校の苦心經營と十ケ年努力とを披瀝せしもの。天下教育改造の警鐘である。

菊判三〇〇頁 定價壹圓八拾錢 送料十二錢

英國 バイウオーター原著 堀敏一譯述

日米關係未來記

太平洋戰爭

日米將來の謎を解き、且つ語る稀有の快書にして、日米の將來を知らんと欲するものは是非一讀あれ。

菊判二三八頁 定價六圓 送料壹圓六錢

下位春吉述

フアツシヨ運動

伊太利國民運動に參加した著者の講演筆記で愛國運動振りが如何に躍如たるかを見よ。

菊判 定價半截 送料五拾錢

鶴友會編

奮闘實傳

大倉鶴彦翁

實業界の大立物として、一世の快男兒たる翁が、裸一貫から今日の大成功をした絶好の立志篇。

菊判上製 天金美本 定價參圓五拾錢 送料十八錢

駒澤裁縫學院長 坂井光子

家庭向物尺いらず型紙いらず坂井式洋服裁縫

（小供婦人服の卷）

一讀すれば直ぐ小供服婦人服が誰れにでも出來る重寶な書

菊判美本 定價貳圓五拾錢 送料十二錢

57
7

57
71

578
71

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black